

教職大学院

Newsletter No. 76

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.8.17

教職大学院と私の研究

仙台白百合女子大学学長 牛渡 淳

私が、大学院生だった時代から一貫して研究してきたテーマの一つは、「アメリカにおける教職の専門職化と教師の職能成長」であった。今から約40年前、アメリカでは、全米的な規模で教員研修改革運動が起こっていた。その名前を「教員センター運動」といった。その運動には、三つのルーツがあった。一つは、教員養成大学の団体が研究を進めていた「大学と学校との連携」による新しい教師教育のシステムとしてのセンターであった。二つ目は、専門職団体としての側面を強めていた教員組合であった。教員研修政策への教員自身による発言権の強化を求めており、専門職としての教員の自律性を実現するための管理機構としてのセンターであった。三つ目は、教師の自主研修を進めていた草の根グループであった。デューイやマズロー等の理論をベースとした「学習者としての教師」の立場に立ち、教員研修への発達論的アプローチをとり、教師の学びの質を変革するための自主的研修の場としてのセンターであった。このように、教員センター運動は、教師の学び（教員研修）の変革を通して、教師へのエンパワーメントを高め、教職の専門職化をめざした、制度的、政策的、理論的な運動であった。しかし、1980年代に入り、共和党のレーガン政権により教員センター運動が終了させられ、代わりに、学力向上運動によるトップダウン的な教育改革が進められていった。これに対して、教員センター運動を担ってきたこの三つの推進母体は再び結束し、1986年の「ホームズグループ報告書」と「カーネギー報告書」を公表し、教職の専門職化と教師教育の高度化のプランを提唱したのである。そこには、教員センター運動で提唱され試みられていた様々なアイデアが、新たな姿で提唱されていた。たとえば、全米教職基準委員会（NBPTS）や教職開発学校（PDS）等であ

あった。これらの提案は、その後、次々に実現されていった。

私は、大学院生の時代からこの教員センター運動の研究に取り組み、今から20年前、研究の総仕上げのため、カリフォルニア大学バークレー校の客員研究員となり、そこを拠点として、全米の調査を始めた。その際に出会った人々は、若き日のリンダ・ダーリング・ハモンド（当時コロンビア大学、のち、スタンフォード大学）、アン・リーバーマン（コロンビア大学、当時アメリカ教育学会会長）、ダン・C・ローティ（シカゴ大学、『Schoolteacher』の著者）、シャロン・ファイマン・ネムサー（ミシガン州立大学）、等である。帰国後、資料をまとめて学位論文とし、それを出版した。詳しくは、拙著をご覧ください（『現代米国教員研修改革の研究』、風間書房、2002年）、このような研究を続けてきた私の目から見て、理論と実践の往還・融合をめざした我が国の教職大学院の理念は、アメリカの教員センター及びそれを引き継いだ教職開発学校の理念とほぼ同様のものであり、特に、学校拠点方式を採用し、学校を教員の養成と研修の場とし、「学びのコミュニティー」づくりやショー流の「省察する教師像」を追求している福井大学の実践は、教員センター運動時代に開発された「大学と学校の新しい連携

内容

- 教職大学院と私の研究 (1)
- 実践研究福井ラウンドテーブル特集 (2)
- スタッフ紹介 (18)
- 院生紹介 (22)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (27)

システム」いわゆる「教員訓練機構(training complex)」と、発達論的研修や教師像を追求した草の根教員センターの両方の理念を受け継いだ、ホームズグループによる「教職開発学校」あるいはカーネギー報告書の「臨床学校」とほぼ同じ理念的基盤の基に作られているように思われる。この点、わが国の教師教育改革の歴史の中では、きわめて画期的、かつ、革命的であり、高く評価されるだろう。他方、こうした理念が、わが国では「専門職大学院」制度の枠の中で、「教職大学院」として、少数の大学院で先導的・政策的に展開されてきた点については、アメリカでの普及方法とは多に異なるし、實際上、中等教育の教科内容の深い研究が十分追求できないカリキュラム構成やスタッフの質と量の問題、学生募集や教育委員会との連携のむずかしさ等、現実的・制度的な課題も多い。今後、国の政

策として、教職大学院が全国の都道府県に作られ、量的な拡大期に入っていくが、それだけに、この理念をさらに普及させるためには、現在の教職大学院制度の課題と限界を踏まえ、地域ごと、大学院ごとにより柔軟な制度・運営が可能となるよう制度改正が必要であろう。と同時に、わが国の教職の専門職化と高度化は、質的にも量的にも、教職大学院だけで実現することは不可能であるし、多様な養成主体が必要であることは言うまでもない。他の教育学研究科の「研究」を基礎とした専門職化と高度化や、一般の大学・学部における特色ある教員養成・研究を最大限生かしつつ、教職大学院の理念と魅力をさらに生かしていけるよう、わが国の教師教育をトータルにレベルアップするための制度設計が改めて政策的に求められていると思われる。

実践研究 福井ラウンドテーブル特集

2015 summer sessions

Zone A 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

Zone A の概要

福井大学教職大学院 特命助教 綾城 初穂

Zone A は、これまで「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマにセッションを積み重ねてきました。今回は、昨年度の2月にも掲げた「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」というサブテーマを継続し、教育現場で展開されている実践に耳を傾け、その気付きを他の人たちと共有していくことを、より深めていくことを目指しました。

Session I のポスターセッションでは、福井県内外の学校から、それぞれがどのように学校づくりに取り組んでいるか報告いただきました。福井県の中学校からは生徒の皆さんもご報告いただき、子どもと教師が入り交じりも共に実践を伝え合う姿がとても印象的でした。

Session II のシンポジウムでは、福井市豊小学校教諭 栃川正樹教諭、福井市安居中学校高嶋和代教諭、奈良女子大学附属中等教育学校 鮫島京一教諭の3名の先生方から、それぞれの問題意識に根ざした豊かな実践報告をしていただきました。

栃川先生は、教師が授業や子どもたちのことを語り合うためには教師の「主体性」がキーワードだと前置きし、ご自身が上級 CST として小さな理科授業研究のための実践コミュニティを校内につくり校外とも協働し展開している取り組みや、授業研究の事前授業研究で研究内容を共有できるようコーディネートし教員の協働性を高めているという報告がありました。栃川先生の「研究授業も事前授業もどちらも子どものことを語れる本番の授業」という言葉が印象

的でした。高嶋先生からは、安居中学校が目指す「社会参画型学力」の育成のための研究組織や、生徒の交流・体験活動の報告がありました。安居中学校の特色として、異教科で協働研究を行う教師、生徒の異学年交流や地域や他校との交流など、「異質性を原理とする協働」により学校文化が醸成されていることを改めて理解することができました。その成果は Session I のポスターセッションで、自分たちの学校のよさを熱く語る子どもたちの姿として実証されていました。鮫島先生は、附属学校の在り方として重要な「教師が学び続けることを大事にする文化」を危うくするものとして、研究開発主義の弊害など大きく3つの問題点をあげ、その解決の1つの方法としてラウンドテーブルの可能性を紹介されました。福井のラウンドテーブルのよさを生かして自身の学校に合った形で学校現場に取り入れようとする鮫島先生の報告は、我々福井大学の教員にとっても参考となる貴重なお話でした。

また、国立教育政策研究所教育研究情報センター総括研究官千々布敏弥先生から、コメントとともに、発表者個々への質問と、子どもに必要な力をどう考えているかという問いがあり、それぞれの発表者から省察的な応答がありました。Session II のコーディネーターを務めた福井大学教育地域科学部附属中学教諭森田史生先生が指摘したとおり、この問いは ZoneA フロア全体への問いとも言え、自らに引きつけて考えることのできる充実したセッションでした。

Session III では、Session II を踏まえ即席で5人程度のグループが生まれ、参加者が考えたことや、各学校の取り組み、そしてそれぞれの課題について語り合いました。互いの実践に耳を傾け、議論と共有を行う中で、学び合うコミュニティが形成されていくプロセスが見られ、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」というサブテーマを象徴するあり方が展開されているように感じられたセッションとなりました。

2015.6.27-28 福井ラウンドテーブルに参加して

～子どもたちと教師が共に学び合うコミュニティを育むには～

福井市安居中学校 加藤 学

6月のラウンドテーブルは、学校現場としては非常に多忙な時期と重なり、参加することを迷うことが多い。しかし、毎回なんだかんだと言いながらもいつのまにか二日連日で参加することになっている。これは、ラウンドテーブルに参加することによって熱意ある多くの実践者と出会い、次の実践へのエネルギーを戴くことができるからであろう。今回も例にもれることなく多くの学びある2日間となった。

Session I のポスターセッションでは、東京都板橋区の赤塚第二中学校の発表を拝見した。今回の発表では、赤塚第二中学校というコミュニティの中で育まれている学校文化を、若手の先生方が語っている姿に感銘を受けた。教科センター方式の学校を立ち上げるにあたり核となる先生が中心となって創りあげたシステムや研究体制が、教師集団全体に広がり受け継がれていこうとしていると感じ、発表を聞きながら羨ましく思った。私が勤務する安居中学校でも負けずに学校文化を教師集団の中に根付かせていきたいと感じた。

Session II では、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」をサブテーマに福井市豊小学校の発表、奈良女子大附属中等教育学校、そして安居

中学校の実践の報告を聞いた。どの報告からも感じたことは、「ラウンド型の学び」が多くの学校現場で創意工夫されながら実践され、広がりを見せていることである。そして、これらの取り組みの先には、教師自身が学び合いながら集合的な知性を育てていく「専門職としての教師集団」があるように感じた。いくつもの課題が次々と生まれてくる現代社会では、子ども達とともに学び協働していくコミュニティによって変革に対応していくことが不可欠になってきている。今回報告された学校では、新しい挑戦を行っているがそこに所属している教師集団は多くの課題を抱えながらも、どこか楽しみながらそれらの問題に立ち向かっているように感じた。多くの学校現場で今回の報告のような実践が生まれていくことで、学校はより豊かな学びを育む場になるのではないかと感じた。

続く、session III でも session II での報告の熱気を引き継ぎ、小グループで実践を語り合った。グループ内では「ラウンド型の学びではその効果を高めていくためには、グルーピングが非常に重要である」ということが話題に上がった。ラウンド型の学びをコーディネートするためには、「know-who（誰が何を知っ

ているのか)」ということを理解し、意図的に人と人を出会わせることが重要である。誰と誰が出会うことにより新たな学びが生み出されるのかを想像しグルーピングを行うことで、不確定要素の多いラウンド型の学びをコーディネートしていくことが可能になる。知識社会の学校では、このような学びをコーディネートしていく力が求められていくことを再確認した。

余談ではあるが、Session I では、安居中学校での実践を生徒が自らポスターセッションで発表を行った。生徒が大人の会議であるラウンドテーブルで発表をするという取り組みは、ちょうど1年前のSummer Session から継続して行っている取り組みである。当初は、「生徒たちに学校内では体験できない経験を積ませたい」という思いや、「安居中学校で生徒たちが育っていることを実際に生徒を見ていただくことで紹介したい」という考えがあつての参加であつた。しかし、回を重ねていくうちに、「子どもたちの学び合うコミュニティを育む」という意味合いが強くなっていった。今回ポスターセッションに臨

むにあたり、子どもたちは既にラウンドテーブルを経験したことがある上級生と初めて参加する下級生と一緒にチームを組み発表の準備を行っていった。この準備の中で、子どもたちは安居中学校での実践をふり返り自分の言葉で語れるように、実践をもう一度意味づけ価値づけしていった。また、上級生とか下級生と一緒にチームを組み発表の準備に取り組むことで、開校当時の様々な重要なエピソードを物語として下級生へと語り伝えることができていた。こういった営みを通して、子どもたちは学び合うコミュニティを学校の中に築いていくのだ。

そして、今回は、そういった子どもたちの取り組みに多くの教職員が関わり、子どもたちの発表を支えることができた。ラウンドテーブルへの参加は、今までは生徒会の活動の一環としか位置づけされていなかったことを考えると多くの教職員が子どもたちの活動に携わったことは、安居中学校にとって大きな一歩であつたと言える。ラウンドテーブルの存在は、安居中学校の生徒と教師が共に学び合い成長していくために、今や欠かせないものとなつた。

教師の力をどのように高め合っていくのか

福井県立若狭高等学校 渡邊 久暢

「若狭高校で育てたいとお考えの『学力』はどのようなものですか？」

この質問をくださったのは安居中学校の中学3年生。ZoneA 学校～子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ～における若狭高校のポスター発表に対して頂いた質問である。

この質問は培いたい「学力」を学校として措置していることが前提となっている。「教員個人がそれぞれ持っている学力観ではなく、学校としてどのような学力を育てたいと考えているのか」、それを問われていたのだ。さらに問われていたのは「この学力観が生徒と共有できているのか」ということだろう。「中学生や高校生にわかる形で学校が培いたい学力を示し、それが生徒に理解されているのか」、こう問われているとも感じた。

もちろん「学校としてどのように学力を培っていくのか。」についても併せて考えていくことが、各学校には求められている。とはいえ、それはトップダウンで決められるものではない。生徒の実態を良く見とりつつ、その見とりを教師間で共有し、学力を高める手立てを考えていく組織作りが必要になろう。

Session II では、豊小学校、安居中学校、奈良女子大附属中等教育学校の3人の先生から、学校における組織作りのプロセスをお示しいただいた。安居中の高嶋先生は、「同質性の高い人々からなるグループではなく、異質な人々からなるチームで協働して問題解決に臨み、その取り組みの意味や判断の基準を多様な視点から何度も問い直すことができるかどうかが鍵だ」と述べ、異教科で協働することの意義を強調された。また、奈良女附属の鮫島先生は、「ご意見番文化の蔓延」という危機を「自分たちが主人公になって何かを変えられるかもしれないという実感を教師一人一人が持つこと」を通して乗り越えていったこと、「教師が勉強することを大事にする文化」「協働する文化」を形成することが重要であることを述べられた。

コメンテーターの千々布敏弥先生からは「子どもに必要な力をどう考えているか?」「その力をつけるための新しい授業をどう考えるか?」という問いが参加者全員に投げかけられた。冒頭に紹介した安居中学校生徒さんの問いと、千々布先生の示された問いは共通するものであつたが、Session IIIにおける小グループでの意見交換を終わったとき、このような

問いについて各学校で話し合うことから、学校における組織作りが始まるのではないかと感じた。

翌日に行われたラウンドテーブルにも参加したが、自分の実践を語り、他者の実践を聴くことを通して、自身の課題が浮かび上がってくることを体感できた。このような形式で自校においてそれぞれの実践をじっくり聴き合うことは、今まで一度もなかったなあ、と反省。今年度後半の研修活動に取り入れたいと考えた。

「アクティブ・ラーニング」がこれまで以上に強調されている今だからこそ、「アクティブ・ラーニングを通してどのような力を学校として育むのか。」そしてそのような力を生徒に育むために「教師の力をどのように高め合っていくのか。」今回の2015サマーセッションでは重要な問いと、大きな示唆を頂いた。この問いに対する自分自身、学校組織としての最適解をこれから作り上げていきたい。

Zone B 21世紀の教師教育をイノベーションする

「チーム学校」を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～

Zone B の概要

Zone B (教師) では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、「21世紀の教師教育をイノベーションする／『チーム学校』を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～」をテーマとして議論を深めていきました。

Session I のポスターセッションでは、教職大学院を設置している新潟大学や宇都宮大学、設置申請中の佐賀大学がそれぞれ特色ある取組について、山口県教育委員会は教育委員会・学校と大学等との連携について、高知県教育センター、福井県教育研究所、福井県特別支援教育センターは教師の力量アップのために取り組んでいる研修について、福井大学教職大学院の拠点校である福井県坂井市立丸岡南中学校は実践研究の内容について発表していただきました。また、福井大学教職大学院も学校拠点の協働実践プロジェクトについて発表いたしました。

Session II では、文部科学省初等中等教育局教職員課長の茂里毅氏と高等教育局大学振興課教員養成企画室長の柳澤好治氏、仙台白百合女子大学長(日本教育経営学会会長)の牛渡淳氏、元福井市立安居中学校長の津田由起枝氏によるシンポジウムが、本学教職大学院教授の松木健一の司会のもと行われました。

茂里氏からは、教育再生実行会議の提言なども踏まえ、文部科学省では現在、次期学習指導要領の改訂とチームとしての学校の在り方、教員の養成・採用・研修の一体化についての議論を同時に行うことにより大きな方向転換を行っていること、学び続ける教員の資質能力の向上のためには、大学と教育委員会

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

が時間軸、空間軸として有機的に連携することが大事であること、などの話がありました。

柳澤氏からは、教職大学院は制度発足から8年を経過して、全体として高い評価を得ており、今後は高度専門職業人としての教員養成の「モデル」から、より大きな役割を担う「主流」として位置づく必要があるが、一方、教職大学院の成果の対外的な説明とインセンティブの仕組みの不足・未整備などの課題もあり、アクティブ・ラーニングや「チーム学校」という大きな潮流の中、教職大学院だからこそできることは何かを考えて、実践と成果を重視する教職大学院の「やってる」ことが「認知される」ようになることを目指すべきとの話がありました。

牛渡氏からは、教育再生実行会議が「教師の育成指標」や「育成指標に基づく研修指針等」の策定について提言したことに関連し、日本教育経営学会が作成した「校長の専門職基準」は、目に見える形で校長の専門性を示す意図があったこと、校長を「教育活動の組織化のリーダー」として捉え、校長に求められる力量内容とその構造を示すものであること、などについての説明があり、これらは、「チーム学校」や教職大学院が果たす役割と関係が深く、教員の専門性とは何かということを示唆するものであるとの話がありました。

津田氏は、福井大学教職大学院の連携校である安居中学校が「社会参画型学力」の育成を目指して様々な教育活動を展開していること、夜のホタル観察会を例に、子どもが本当にやりたいことを保障してあ

げると意識を持つことが教員にはとても大切であること、「生徒が主役の学校づくり」を生徒と一緒に考え、つくることなど、教員や学校のあるべき姿について実践経験をもとに熱く語られました。

SessionⅢのフォーラムでは、参加者と福井大学教職大学院のスタッフが5～6名の小グループに分かれ、先の2つのSessionを受けて、それぞれが各自

の取組と課題に照らし合わせながら議論を行いました。

この後に投稿いただいているZone Bの参加者からの感想にもあるように、時宜にかなったテーマとそれに基づく議論は、各人の課題意識に呼応し、全体として有意義なセッションであったように思います。

伝統と革新

伝統あるラウンドテーブルにポスターセッション発表で初めて参加させていただいた。2日目のみの参加となったため、ここで生じていることの表面に触れただけかもしれないが、時間を経るにつれ湧き上がり動き出してくるような感覚が続いている。

テーマは極めて今日的かつ革新的であった。参加したZone Bは、現代社会の状況や国の動向を踏まえ、教師の学習観の転換をキーワードに、学び続ける教員を支えるシステムをどう構築していくかということについて、教員の養成・採用・研修の一体化を柱に、教職大学院の在り方、「チーム学校」の在り方など、多様な角度から問題提起された。ともすれば、今だけを見たり情報をそのまま並べたりするだけですませがちになるが、ここでは、これまでの経緯と将来を見通し、大学として諸情報を捉え直して構造化することにより、諸々の教育課題に対して明確な意味付けがなされていた。それゆえに、ポスターセッション、シンポジウム、グループ協議等の場で、多種多様な実践・研究と全国から集まった様々な人とが出会ったとき、目指すべき改革に向かう新たな実践の可能性としてつながり、思索を深めることができたのではないだろうか。

高知県教育センター チーフ 武市 綾香

また、福井大学のあらゆる場所で、とても厚い冊子を目にした。ぎっしりと書き込まれた実践記録が綴じられたもの、10数年の研究の記録を編集し直したものなど様々であったが、どの冊子にも、たどってきた足跡を大事にすることが貫かれているように感じた。個人の積み上げも、組織としての歴史も、それらが確かな今をつくりあげ、将来を見る力を培っているのであろう。変化の激しい現在であるからこそ、このようにしっかりと立ち止まり、何が生じているのか見極め、思考し抜くことが必要だと思う。まさに「省察」である。ラウンドテーブルでは、語ることや聞くことによる省察の入り口も体験させていただいた。

「学び続ける教員には、研修という言葉よりも研究という言葉の方がしっくりくるような気がする」という言葉も心に残った。研究には主体的に問題意識をもつことや深い洞察力も求められる。それを一人ではなく、学び合う仲間、学び合う組織として行うことが学び続ける教員を支えるとともに、アクティブ・ラーニングへの転換を目指す今、とても大切なことを、ラウンドテーブルの省察を通して考えることができた。

Zone Bに参加して

奈良女子大学教育システム研究開発センター 特任助教 盧 珠妍

6月27日(土)、28日(日)の二日間、福井大学教職大学院主催の「実践し省察するコミュニティ」というテーマを掲げた「実践研究 福井ラウンドテーブル」に、今回初めて参加することになった。

四つのZoneのうち、私はZone B「21世紀の教師教育をイノベーションするー「チーム学校」を支える

教師教育～教職大学院の成果を問う～」を選び参加した。

ますます国際競争が激化していく一方で、日本の教育界ではいま、大学入試の抜本改革が中教審から答申され、また指導要領改訂の時期を目前とするなど、学校教育に大きな地殻変動が起ころうとしている。そんな中で、学校教育において教職員の力をどの

ように発揮していけばよいか重要なキーとなることは間違いない。

まず私の興味を引いたのは、Zone Bのサブテーマである「「チーム学校」を支える教師教育」のために、行政、学校、教職大学院、地域が各々どのような組織をつくり、それぞれがいかにして関わりながら「オートポイエシス」的なシステムを構築してきたのかということである。それにまつわる話は、「セッションⅢフォーラム」で聴くことができた。自分たちのグループでは、コーディネーターである福井大学教職大学院の先生をはじめ、同大学院生の現職教諭、福井大学附属小学校副校長、福井県教育庁教育総務課長、それと県外からは富山大学教職大学院教員と、様々な立場の方々とは有意義な議論を交わすことができ、その中で福井大学教職大学院が教職大学院としてどのようなシステムを目指してきたか、そしてこれから目指していくのかを聴けたのは貴重なことであった。

その有意義な経験とともに今回、私はある得難い体験をした。一つのテーブルを囲んで進行されたフ

ォーラムの議論における「不思議な衝撃」の感覚はいまも鮮明に覚えている。その秘密は「ラウンドテーブル」という形態に隠されているようだ。ゼミでも勉強会でも（大小や段階の違いはあっても）、異なる分野、地位、立場の人たちの囲んだ一つのテーブルは、穏やかに、それでいて熱く意見を交わし議論できる場となり、互いに正面から向き合うことができる空間・時間となる。さらに、相互に刺激し合い、支え合い、それにより関係性自体が変容していくことが実感できるのである。縦横無尽に、柔軟に融合し、自己変容を遂げる生きたシステム（＝「オートポイエシス」システム）としての「福井ラウンドテーブル」は、別の言い方をすれば理論（思想）と実践が一つの有機体のごとく、自律的に動いているとも言えるのではないかと強く印象づけられた次第である。

今回、あらためて行政、学校、大学、地域の連携のあり方、特にその中でも大学の役割について、また組織をなす人々との向き合い方、つまり「他者との連携」のあり方の理論的な形態とは何かについて考えさせられた意義深い時間であった。

驚愕！ 共学！ 福井のラウンドテーブル

福井県教育庁 教育総務課長 大類 由紀子

福井大学のラウンドテーブルに初参加した理由は、福島大学からのお誘いを受けたからでした。今、福島大学では教職大学院を開設できるよう、福島県教委とともに構想を練り上げている最中です。私は、福島大学と県教委がどのような関係を結んで教職大学院を運営すれば、より教員のためになるのか、そのヒントを得たくて参加しました。しかし、参加して得られた示唆は、福島県の教育を根本から問い直す、大きなものでした。

Zone Bでは「チーム学校」を実現するための教職員一人一人の在り方や、その際の教職大学院の関わり方などが小グループで議論されました。そこで福井の学校関係者から聞いたこの言葉に度肝を抜かれたのです。

「福井では困り感のある先生をすぐに助け、救う学校文化が根付いています。昔から当たり前のように、そうでした。」

他の福井の教育関係者からも話を聞くと、ある中学校では、敢えて教科や校務分掌が異なる教職員同士5人ほどで、週に一度、1時間近く日常の取組や課題を話し合うことで、情報を交換したり解決策を提案し合ったりしているとのことでした。これにより、

教科を超えてよりよい指導方法を模索したり、個々の生徒の見えなかったよい面を共有できたりするというのです。

教職員一人一人は立場や専門性に違いがあるだけでなく、得意分野にも差異があります。その前提の中で、互いに話し合い、不足している部分を埋め合わせ、ブラッシュアップすることが学校力の向上につながり、児童生徒に還元されていることがよくわかりました。私は、この埋め合わせ、高め合いの文化は、福井大学教職大学院の「実践カンファレンス」の伝統が各学校に普及したことによるものだと思確信しました。福島での学校現場でこのような文化が根付いている例はごくわずかであり、さっそくすぐに普及したいと思いました。学校力を高める上で、有無を言わせぬ説得力があったからです。教職大学院の創設を俟たずとも、すぐに着手できることだったからでもあります。

まずは県教委関係者から、ということで7月15日には福島大学関係者と県教委職員により、「教員の資質向上方策について」セッションを行いました。参加することで、これから自分の打つべき手がクリアになりました。さらに、あらゆる教育関係者とラウンド

テーブルの場を設けられるよう、計画を立てているところでした。

福井のトップレベルの学力、体力といった成果の裏には、学校、大学(院)、行政を通じた福井の教育界全体のチーム力があることに気付いた2日間でした。特に感心したのは、こうした教育イノベーションの手法を、他県の教育関係者や私立関係者にも開くことで、福井を超えた教育の向上を視野に入れているところでした。さらに言えば、多くの大学(学部)生

をラウンドテーブル参画させることで長期的な教育界の発展を期していました。

福井と福島。遠くはありますが、同じ「福」つながりで、これからも多くのことを学ばせていただき、いつか恩返しできる日を目指して、日々、実践と省察を繰り返していきたいと思います。福井大学そして福井の教育関係の皆様、本当にありがとうございました。

Zone C 学び合うコミュニティを培う

Zone C の概要

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

Zone Cは福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅前のAOSSA会場にて行われました。当日は福井県内の公民館主事の方や福井大学の学部生・留学生・院生達、学校の先生方、そして企業の方々など約120名の参加がありました。

Session I ポスターセッション<実践に学び合う広場>は、1階と4階の展示スペースにて行われました。4階では、福井市・越前市・勝山市・池田町の公民館、福井大学探求ネットワーク、ふくい市民国際交流協会、市立札幌大通高等学校、福井ローターアクトクラブといった多種多様な実践が会う場となりました。また、1階では、福井市の公民館紹介コーナー、福井学「福井らしさの再発見」コーナーなどが設置され、参会者をはじめAOSSAに来ている市民の方々が足をとめて見ておられました。

続くSession II シンポジウム<問題提起>では、ふくい市民国際交流協会の辻瑞聡子氏と、長崎外国語大学の神吉宇一氏をシンポジストに迎え、「持続可能なコミュニティをコーディネートするー多文化共生社会を支える<聴くこと・省みること>ー」というテーマに取り組みました。辻瑞氏からは、協会の交流事業や地域づくり事業をはじめ、福井市教育委員会の委託の下取り組んでおられる外国籍児童生徒のサポート事業が報告されました。外国籍児童生徒のサポートにおいて辻瑞氏が実践している具体的なこととして、教育委員会・学校・日本語ボランティアの橋渡しや、日本語ボランティアの方々の「声」を大切に、そこから外国籍の子ども達の状況把握や派遣制度・

指導法の見直しを行っていることが語られました。多文化共生の制度設計にも関わっておられる神吉氏からは、神吉氏が多文化共生を考えるようになったプロセスが、自身の海外経験等を踏まえ等身大にリアルに語られました。そして、企業・医療・介護・学校・地域等様々なフィールドで聞き取ってきた当事者・実践者・関係者達の声から見えてきた日本人住民と外国人住民の平行ワールドの実態や、コミュニティとコミュニティがつながっていくためのコミュニケーションのあり方の再考が提起されました。

シンポジウムでの問題提起を受け、Session III クロス・セッション<小グループでの実践交流>では、様々なフィールドで実践を行っている参会者が、5~6人の小グループとなり実践の報告・交流を行いました。今回特徴的だったのは、各テーブルに福井大学探求ネットワークの学生が2名ずつ参加していたことでした。地域・行政・学校・企業の方々によって探求ネットワークの取り組みが丁寧に聴かれ、学生の活動とその意義が広く知ってもらえる場ともなりました。学生からは「自分の実践に関心を持ってもらえて嬉しかった」という声や、聴き手の公民館主事の方からは「娘・息子と同じ世代の若者の取り組みが聞けて刺激になった」という感想が寄せられました。

地域・世代・領域を超え実践が出会い、そこからコミュニティとコミュニティがつながり、さらにお互いの実践を語り・聴くことによってそのコミュニティが編み直されていく……。その蠢き(プロセス)を肌で感じたZone Cでした。

新たな視点, 活動継続への力を得たラウンドテーブル

公益社団法人ふくい市民国際交流協会 辻端 聡子

今回初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。シンポジウムでは、長崎外国語大学の神吉先生とともに多文化共生に関する取組について発表する得難い機会をいただいたことに深く感謝いたします。つたない内容ではありましたが、日頃業務に追われてなかなか整理することのできなかつた活動内容を、発表準備のためにじっくりと振り返ることができたこと、さらに、神吉先生とのお話の中で新たな気づきを得たことで、今後事業を継続していく大きな力をいただけました。

また、神吉先生のお話はどれも楽しく、楽しい中に鋭い考察があり、その中でも「人を肩書きや外見や国籍という『ラベル』で見ない」というお話がとても印象的で、私たちの日頃の活動はまさに『ラベル』で見ないということを大きな目的にしているのだと再確認しました。

当協会では、福井市の委託を受け、毎年福井市内の中学生10名を姉妹友好都市へジュニア大使として派遣しており、今年の3月にはジュニア大使たちとともに中国杭州市を訪れました。現地で杭州市の中学生と交流し、中国の家庭に1泊のホームステイ体験をしたジュニア大使の1人が「これまで、中国についてはマスコミから伝わる情報しか知らず、様々な社会情勢や事件、環境問題などマイナスのイメージが強かったけれど、実際に訪れたことで中国という国、学生、暮らす人々のイメージがずいぶん変わ

りました。これからも情報を鵜呑みにしないで、国やそこに暮らす人々の本当の姿を理解していきたいと思っています。」という感想を寄せてくれました。

中学生である彼女は、交流を通して、人を「ラベル」で見るべきではないことに気がつきました。彼女のような考えができる人が少しずつ増えていけば、神吉先生がお話になった川崎市の日本人・外国人コミュニティの2分化のような危機も回避できるのではないか、と改めて草の根活動の重要性を感じました。

クロスセッションでは、子どもたちと関わる大学生3名から取組についての発表がありましたが、特に探求ネットワークでの取組の発表は、私たちの小学生対象の異文化理解講座と重なる部分もあるため興味深く、1年を通して子どもたちと関わり、時には課題にぶつかり、戸惑い、運営について悩み、取組をよりよいものにするために工夫する様子は、臨場感にあふれ目の前に現れてくるようでした。今年もまた2年目の取組をするそうですが、可能ならば2年目の活動を終えた彼らの話を再び聞きたいと思っています。

さまざまな実践者のお話を聞くことができた今回のラウンドテーブルですが、取り組んでいる内容は一見違うように見えても、根底に流れる思いに共通するものを見出し、1人1人の実践者たちの1歩が積み重なり、地域全体の大きな1歩につながっているのだと感じました。

続けるということ

～実践研究福井ラウンドテーブル 2015 サマーセッションに参加して～

福井市酒生公民館 竹嶋 純子

今回のシンポジウムは「多文化社会を支える」というテーマで、外国籍の子どもたちをサポートしている日本語指導ボランティアの現状と、外国語大学の先生から見た多文化共生のお話とのこと。今考えると大変失礼な話なのですが、アパートやマンションがひとつも無い、のどかな田園地帯の我が地区には全く関係ない話…とっていました。ところがシンポジウムが進むにつれ話に引き込まれていく自分が！まさに〈見ること・省みること〉これだからラウンドテーブルはやめられないのです。

昨年、ある事業をきっかけに、子どもたちが頻繁に公民館に出入りするようになりました。子どもながらも、学校では社会の一員として頑張っているのでしょう。1対1で正面からぶつかってくる子どもたちは、公民館では解放されるのか、自由奔放にふるまっていました。顔なじみの地区の子どもたちでさえ関われば関わるほど、どのように接し、どのように向き合えばいいのか悩みは尽きませんでした。ましてやそれが外国籍の子どもたちとなると、言葉の壁はもちろんその大変さは計り知れません。運営会議では、

「聞いてほしい」「話したい」と、張りつめた気持ちを抱えた子どもたちからの「声」を聴き、ボランティア一人で抱え込むのではなく、全員が共有するという、ボランティア側をサポートする体制もしっかりとなされているからこそ、安心して子どもたちを見守り、支え続けていけるのだと感じました。

公民館主事になり6年目。わけがわからないながらも、一粒一粒、願いを込めて蒔いた種が、あちらこちらから芽を出し始めました。しかし、せっかく出た芽をどう育てていくか、またどう増やしていくか。成長と共に、課題も変化していきます。評価や結果を気にして前に進めず足踏みしていた自分の胸に、今回のシンポジウムの言葉が「がつん」と響きました。ユーモアを交えながら話された神吉先生。ラベルで見ないということ、まさに今回の私です。まわりをよく見ないうちから勝手に判断してしまうのではなく、まずは現場に足を運び、見て、聞くこと。どうしたら喜んで飛びついてくるか。よく知らない人にわかり

やすく伝えるためにはどうしたら良いか。ふれあいの場・息抜きの場を設ける(居場所作り)。課題を洗い出す(話し合い・聞き合う場)。そして圧勝でなくてもいい勝ち続けること。どの言葉もすべて公民館活動の原点につながっていました。

コミュニケーション能力とは、聞き上手なことと先生はおっしゃいます。クロスセッションでファシリテーターの大役を仰せつかったものの、今回もまた、参加者のみなさんに助けていただきました。違った場所で活動している報告者同士が、同じような悩みにぶつかっていたり、シンポジウムでの言葉が解決のヒントになったり。どンドン話が膨らんでいくのもラウンドテーブルの面白いところです。報告者の話を引き出すどころか、足踏みしていた自分が、逆に背中を押していただいたような気がしました。

今回、多文化社会を支えるという視点から、改めて公民館を省みる機会をいただけたことと、今回の開催にご尽力いただいた皆さまに感謝いたします。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して学んだこと

Zone C コミュニティ-学び合うコミュニティを培う-での発表を通して

目白大学大学院 言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士1年 神定 いずみ

このたびは貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。想像していた以上に多くの発見や気づきがあり、2日間と言う短い間に人間として少し成長できたように感じています。

はじめにラウンドテーブルで発表してみないかとお誘いをいただいたときは、本当に軽い気持ちで「面白そう」「滅多にない機会だからやってみよう」という思いだけでお受けしました。「自分の実践を共有する」ということはさほど難しいことではないように感じていたからです。しかし、発表の原稿を考える段階になり、自分の考えの甘さを痛感いたしました。全く会ったことがなく、興味のある分野も育った環境も何もかもが違う方々に自分をわかってもらう、ということは、本当に言葉を尽くさなくては行かない大変なことだとそのときはじめて気づくことになりました。

しかしながら、今思えば、そのときから私の「学び」は始まっていたように感じます。ときどきは立ち止まってこれまでの経験を振り返ることはありましたが、私には普段から日記をつけるような勤勉さはありません。自分がどのような価値観で生きてきたのか、何に興味をもち何に苦手意識を抱くのか、初めて

会う方にどう伝えるべきなのか考え文字化する作業は、過去を振り返りつつも未来のことも考える良い機会になりました。

Zone Cのシンポジウムでは、私と同じ分野(日本語教育)についてお聞きすることができ、とても勉強になりました。と同時に、私にとって身近な分野がほかの参加者の方には目新しいものであることに改めて気づき、自分にとっては当然の「前提」としてある考え方が決して世間一般に通用するものではないということに再認識することができました。

クロス・セッションのメンバーはファシリテーターに公民館の方、大学生3名と私の計5人で和やかな雰囲気になりましたが、いざ報告を始めるとなるとやはり緊張してしまい、4名の方々にはお聞き苦しい発表になってしまったかと思えます。それでも真摯に聞いてくださり、興味を示していただけたことは本当にありがたかったです。

ほかの方々の報告も大変興味深く聞かせていただきました。他学部・他専攻の話を聞く機会もなかなかありませんが、まして他大学の、学年も違う方のお話を聞くのは初めてのことで、視野が広がると同時に、自分が生きている世界がいかに狭い世界なのかを痛

感することとなりました。また、報告に対するほかの方の質問も、それぞれのバックグラウンドに根差した視点からのもので、その着眼点も大きな学びとなりました。

「学び合うコミュニティ」のタイトルの通りにほかの方の学びに繋がる報告ができたのかいささか不安

は残りますが、大変貴重な体験と学びを得ることができました。

素晴らしい機会をいただき、本当にありがとうございました。

Zone D どうしたらできるの？～アクティブラーニングを考える

Zone D の概要

福井大学教職大学院 コーディネーターリサーチャー 加藤 正弘

子どもたちが夢中になって学び合う授業はどのようにしたら実現できるのか…。前回のラウンドテーブルで残された課題はこの問題の解決でした。100名近く参加した ZoneD では、それぞれの校種で実践されている事例を手掛かりにして各テーブルで話し合うことにしました。思考を活性化させて子どもの持つ可能性を具体化させるアクティブラーニングとしての学習活動は、身近な幼稚園教育の実際



福井大学附属幼稚園

に容易に見ることができます。そこで、幼児教育から学ぼうと福井大附属幼稚園・笹川先生、新渡戸文化短期大・石井先生から、福井大附属幼稚園における幼稚園教育の実践報告とレジャ



レジャ=エミリアの幼児教育

紹介がポスターセッションで行われ、参加者との交流がはかられました。

続いて、牛久市立ひたち野うしく小学校・本橋教頭先生から1年

生の「学び合う教室文化をつくる1年間」と題し、ペアやグループによる協働学習の成長過程を、職員の校内研修といった視点を踏まえながら報告していただきました。報告の中で紹介された算数の授業において、課題解決に挑む1年生の学び合う姿が印象的でした。

さらに、現在、今春福井大附属中から公立中学校に転出した永廣先生から、福井大附属中で実践した「課題一探究一表現する協働探究型授業」の実際について、公立中学校で授業する場合と比較されながらのお話をお聴きすることができました。授業力は教員

が工夫した協働研究の発展とともに高まり、附属で実践していた協働探究型のアクティブラーニングは公立学校でも生徒の能動的な学習への



ひたち野うしく小学校

参加を促すことが実感でき、生徒の成長も教師の成長も授業における探究するコミュニティの中から育まれるという主張が具体的で豊富な実践事例をもとに詳しく報告されました。

各テーブルに分かれて行ったグループ協議では、前述の報告を手掛かりに熱心に話し合われました。強い発意と探究を促す課題の確かさ、そして活発な学習活動を支える子ども集団の風土。校種を越えて



福井大学附属中学校の実践報告を経てグループ討議

共通するこれらの点について、グループごとにそれぞれの実態と展望を語り合い、アクティブラーニングについての考えを広げたり深めたりすることができました。

実施後のアンケートでは、「参加者が異なる校種で編成されたグループ協議において授業展開を具体的に深めていくにはエネルギーを必要とした」という感想があった一方、「異校種の先生から新たな視点をもたらえた」という感想もあって全体として好評でした。また、表面的で浅いアクティブラーニングを、ディープ・アクティブラーニングにしていくためには教師にはどんなファシリテーションが求められるのかといった新たな疑問なども書かれていて、参加者から今後の、Zone Dの課題を考えるときの参考になる貴重が考えをたくさんいただくことができました。

福井ラウンドテーブルに参加して

牛久市立ひたち野うしく小学校 本橋 和久

今回初めて参加しました。様々な背景をもつ参加者の皆さんと文字通り face to face で交流することができ、想像以上に「柔軟で多様に溢れた研究会」という感想です。参加者が持ち寄る話題が様々で、いずれも私にはとても新鮮に感じられました。

石井希代子先生からのレッジョ・エミリアについての報告からは、日本の学校で行われているアートの教育について考え直すきっかけをいただいたと思います。そのポイントは「つくる」より「自己表現」、すなわち、どう表すか、どう見せるかを大切にすること、子どもたちが「好きなものを見つけること」を促すような環境を用意することなどです。自分の勤務校では果たして子どもの自己表現を支える「わざ」としての技法や豊かな「素材」を十分に用意しているか、校内研修の際に全職員で考えてみたい重要な課題だと思います。

現地で研究された経験をもとに、多数の画像を交えながら興味深いお話をしてくださった石井先生に感謝申し上げます。

私自身の実践を紹介する機会もいただきました。他者に伝えるためには、これまでの取組を見つめ直し、再構成する作業が必要になります。その過程で、まだまだ自分の理解が浅いこと、見方が狭いことなどに気付きました。例えば、教科の本質に沿った授業づくりのあり方です。協同的な学びの考え方に基づく授業研究を月に1回～2回組織して実践を始める段階では、全ての教師が同じステージで協議できるように、子どもの学ぶ姿を話題にしながら、そこから我々が学んだことを交流し合うというスタイルをとってきました。しかし、授業研究が軌道に乗り、子どもの関係性だけを議論してもなかなか学びの質が高まらなくなってくると、どうしても教科の本質を深く掘り下げる必要が生まれてきます。現在の勤務校では、まさにその段階にあります。その課題を抱えながらこの研究会に来て、他の先生たちの実践から学んだのは、やはり教科の本質に迫る授業を求めているということです。協同的な学びの哲学とヴィジョンを軸としながらも、学ばせる内容をいかに洗練していくか。これが今後の課題です。

もう一つは、前述した教科の本質に迫る授業づくりをどう進めていくかです。基本は全教科領域での



実践研究が必要だと思います。これまで現在の勤務校では、国語、算数など、年度ごとに特定の教科を重点的に研究してきた経緯がありますが、そのアプローチでは、私たちが目指している全ての教科の全ての授業の質を上げることにはつながらないこともある、ということです。もちろん、国語あるいは算数の授業を参観して学んだことは次の社会や理科などに十分適用できます。基本となる学びの作法や教師の居方などは共通しているからです。しかしそれ以上に、授業が定型化・マニュアル化することで、子どもの学びが見えなくなったり、その教科以外の授業において課題や資料の質的向上がなかなか実現したかったりする弊害も見えてきました。そこで、今年度は算数に特化せず、個人のテーマに基づいて多様な教科で授業研究を進めようと呼びかけているところです。

第2日に同じグループになった同志社中学校の理科教諭、戸賀沢先生が紹介してくれたものの中にカラークリップの磁界可視化教材があります。本校に必要な「教科の本質に迫る教材」の具体例だと思います。早速理科支援員や事務職員を巻き込んで製作してみました。廊下を通る子どもたちに見せては「どうしてこうなるのかな？」などと彼らの反応を楽しんでいます。特に、学級担任制を基本とする小学校では、このような教材開発を協同化すると、各教師が知恵を持ち寄って楽しい教材研究ができるのではないかと。そのヒントをいただいたように思います。

福井のラウンドテーブルに参加して全ての教科の全ての授業の質を上げるためのヒントをたくさんいただきました。また機会をつくって参加していきたいです。

Zone D に参加して

福井市至民中学校 永廣 裕子

「当時は、とても楽しい内容の実験で、おもしろいと思ってやっていたのかもしれない。でも、高校の理科の授業で公式を習ったときに、“確か金属の表面積が大きくなるようにすればよかったな”と、中学校の時の実験結果を思い出し、公式を本当に理解することができた。これは、授業で先生から習うだけでなく、実際に自分たちで失敗を繰り返しながら何回も実験したおかげで、公式までの思考につながったのだと思う。また、中学校では、いろいろな意見を聞いて、それを自分でどう処理して自分の考えにしていくなか、人とのコミュニケーションの取り方も学ぶことができた。」

これは、福井大学附属中学校に赴任して協働探究型の授業に取り組み始めた当時の生徒がその頃を振り返り語りしてくれた言葉である。この時、知識を習得することだけを考えた教師主導の授業をしていたら、このようには語らなかつたであろう。

今年度、新任校で「なぜマグネシウムは二酸化炭素の中で燃えるのか。」というテーマのもと、協働で探究していく授業に挑戦した。これまでの経験や既習事項と生徒の思考が繋がらず、課題の残るものとなった。しかし、授業を終えるたびに、教卓の周りに来て、「今日の授業、楽しかった!」「何でそうなるの?分かんわあ!」という声が聞こえるようになった。また、生活ノートに理科の授業について綴ってくる生徒も増えていった。この「楽しかった!」は、ただ実験が楽しいからではない。仲間とともに考えを出し合い疑問を解決する過程において、自分の気がつかなかつた考えを知ったり、自分の考えをさらに深めたりすることが楽しいのである。どの生徒も、「わかりたい」、「学びたい」と思っている。知識を習得するのも大切であるが、そこからさらに教師が

一工夫し協働で学びあう探究型の授業をすることで、学びが広がったり深まったりする。さらには、将来生徒が何か問題に直面したときに、それを解決する手がかりや術を見つけ、自分自身で乗り越えていくのに役立つ力が育めると考える。

今回、これまでの自分の授業実践を省察し、再構成したものをシンポジウムで発表したことによって、「教師として教えたこと」、「教科としてつけた力」と「子どもたちの問い」を一致させたり、意欲が持続するような教材を探したり、探究過程のカリキュラムを考えたり、生徒の考えを見取りそれを授業に生かしたりするには、教師のデザイン力が必要であると改めて感じた。同じ状況、同じ教室、同じ子どもはどこにもなく、授業も同じ授業は存在しない。よって私たち教師も、常にそのときその場にいる子どもに向き合いながら実践していくことが大切である。現代社会を強く生き抜く子どもを育てていることを



忘れず、「今、目の前にいるこの子にとって何が必要なのか、今何をすべきか」を考えながら、今後も協働探究型の授業に挑戦していきたい。

Round Tables: Summer Sessions 2015

ラウンドテーブルに参加した院生からの報告

実践研究 福井ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions 報告書

教職専門性開発コース 1年 串 尚哉

平成 27 年 6 月 27. 28 日の 2 日間福井ラウンドテーブルが開催されました。1 日目のゾーンごとに別れた

セッションも 2 日目のグループでの実践報告でも考えさせられる話をいくつも聞くことができました。

1日目のゾーンごとのセッションではゾーンD「どうしたらできるの?～アクティブラーニングを考える～」というテーマのもと話し合いが進み、私の参加させてもらったグループでは特に『子供同士の話し合い』の話題に注目が集まりました。その中でも私にとって印象深かったのは2種類の話し合い方についてでした。1つは特定の答えがなく考えを広げるための話し合い、もう一つは一つの答えにたどり着くための話し合いです。この2種類を意識することは子供たちに話し合いの場を仕掛けていく上で非常に重要なものであると感じました。『話し合い』は学習の手段であり、目的を達成するために適切なものを用いなければならないということを改めて意識させられました。図工などの制作前のイメージを膨らませるための話し合いなら前者を、学級目標を決めるなどの話し合いなら後者を選択しないとはいけません。このように考えだすと話し合いの種類というものは多種多様であり、それぞれ適した使用場面があるのではないかと思えてきました。人数や時間、形式だけでなく、参加者たちがどのような意識や目的を持って臨むかも『話し合い』の重要な要素の一つだという視点を得ることができました。

2日目のグループセッションではこれまでに詳しく話を聞く機会の無かった商業高校や通信制の高校について話を聞くことができました。特に印象に残っているのは社会とつながって子供が育っていくというお話です。商品を仕入れ販売したり、養蜂から行ってはちみつを販売したりと学校の中のみで活動を行うのではなく子供を外に連れ出し、多くの人との

関わりの中で育ててもらおうという話でした。この話は普通科の高校を卒業した私にとってうまく想像できないものではありませんでしたが、同時に漠然としたあこがれも感じました。なぜだろうと考え浮かんだ答えは「他とは違う特別な何か」を得ることが出来るのだというものです。話を聞いただけの私でさえ「え～!そんなことが高校でできるの?!」と驚いたのですから、実際に取り組んでいる高校生たちが感じているものや先生や地域の人の評価は相当なものではないかと思えます。それらは私の想像を超えたもので、子どもたちにとって特別なものなのだろうと思えます。特別であるという感覚が自分に対する自信や次への意欲を生むのだと考えました。社会とつながることは授業やその他学習活動の中で子供に特別を感じさせる手段の一つなのだろうなと思えます。子供たちがどのような過程を経て結果にたどり着き、どのような評価を受け、それをどう捉えるかという点に十分注意する必要がある、知識や技能を習得したかどうかだけに注目してはいけなかったと思います。

今回ラウンドテーブルに参加して改めて自分とは異なった立場にいたり、異なった経験を持っていたりする人の話を聞くことは面白いなと再確認できました。結論や結果はもちろんですが、それ以上にそこにたどり着く過程を聞くことが個人的にとっても楽しかったです。大変だったなという思いが無いと言えようそになりますが、それを踏まえても参加してよかったと思えるラウンドテーブルでした。本当にありがとうございました。

ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 2年 吉田 智保

福井大学教職大学院の門を叩いてから3度目のラウンドテーブルを迎えた。多くの先生方との出会いがあり、その中で実践の共有や新たな発見ができるこのラウンドテーブルは、今や私の中で一大イベントとなっている。そんな一大イベントを控えた金曜日、2日目の報告で用いるストレートマスター2年の実践報告書が刷り上がった。私たちは嬉々とした表情でそれを受け取った。そしてその実践報告書を片手に、ラウンドテーブルへの期待を膨らませながら会場の事前準備にも一層力が入ったのを鮮明に覚えている。

この2日間、私は「若手として○○」ということを中心に自分の核としてラウンドテーブルに臨んだ。というのも、今年度に入り若手の育成に励んでいるリ

ーダーの先生方のお話を伺う機会が多いということ、また実際に現場においても若手の教員が多い現状から、避けては通れない課題であると考えたからである。今回は特に上記のことを実感したグループ討議について取り上げたい。

まず1日目のSessionⅢにおいて、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」を軸に語り合いが始まっていった。メンバーは県内の先生方で構成されていたが、異校種であったため校種を越えた多様な意見が飛び交う。校内の組織づくりや研究会についての話から、話題は若手の育成へと移った。その中で嶺南の高校からご参加されている先生は、ある課題を抱えていた。それは、組織づくりの中での若手の育成は避けては通れないということである。

その背景に、校内の教員層を年代別に見ると、中堅の層がなく若手の占める割合が大きいという現状があるからだとおっしゃっていた。この課題をもとに、グループの先生方の実践の語りが繰り返された。メンタリング制度を導入し日々の小さな悩みから授業力の向上まで、若手教員を支えていく組織をつくり上げているという先生や、学校の枠を超えた若手育成の場づくりに積極的に取り組んでいる先生もいらっしゃった。その取り組みの中で共通していたのは、若い世代が必死にもがく姿に何とか力になれないかということ、また同時に福井のこれからの教育のためにも自分たちが出来ることを残していけないかという思いであった。

しかし、それと対照的に若い世代への問題を指摘する場面も見受けられた。ある先生は、失敗したくないという思いに引きずられ、挑戦心や協働性に欠ける若手も目の当たりにしたという。その原因のひとつには、同僚・上司への目がある。つまり頑張っただけに見られたい、力のない奴だと思われたくないという気持ちのことである。結果、一人で抱え、弱さを見せたくないがために窒息してしまう。だが、福井県では自分の弱みを開いてもそれを受け入れ、支えてくれる多くの先生方がいらっしゃる。また、若い世代が心置きなく挑戦出来る環境にある。私はこの日これらを強く実感することができた。そして同時に、若手を献身的にサポートしてくれる先生方の思いに心動かされ、全力で自己の学びの向上のために挑戦し失敗から学ぶ、そんな教師になりたいと思いを強めた機会となった。

そして2日目。昨日とは打って変わってグループのメンバーは県外の先生方が大半であり、またそ

の半数が私と同世代の若手であった。この実践報告終了後、私は何とも言えない達成感とやる気に満ち溢れていた。なぜなら、壁にぶつかりながらも試行錯誤し、現状を何とか変えたいという確固たる意志を持っている実践者の思いに触れることが出来たからである。加えて、その実践者の課題に対しメンバーもひとつになりながら、クロスセッションを行うことで多くの新しいヒントが生まれたことも挙げられる。図書館教育に関する実践報告においては、学習くつろぎ空間として活字離れが進む生徒をどのように図書館に寄り付かせるかという課題を共有した。その際、校内の教師の推薦書のコーナーを開設するという意見や、また花を飾るなどの小さな工夫であるが場の雰囲気を変えるとといった意見など多くの考えが飛び交った。またNIE教育に関しても、新聞を必ずしも「読む」という切り口から入るのではなく、新聞からクイズを作成するなどの「遊ぶ」という切り口から入ることも可能だという考えもあった。目的があると子どもは一生懸命読もうとする。自由な読み方が、自分で情報を取捨選択する能力の育成に繋がるのだと根拠をもって私自身も考えさせられた。

とても実りのあるラウンドテーブルであった。「来てよかった。今日の意見、自分の県に、学校に持って帰ります。」そうおっしゃっていたグループの先生の清々しい表情が今でも思い出される。若い世代として必死に努力している先生や学生、それを支えている多くの先生方を目の当たりにし、自分に更にエンジンをかける機会となった。これらを新たな明日からの活力とし、精進していきたい。

ラウンドテーブルに参加して

スクールリーダー養成コース 1年／福井市足羽中学校 神部 浩平

新しい世界に触れること、自分の歩みを見直すこと。ラウンドテーブルに参加して、私が感じたことを要約するとこの2つになると思う。多くの人と交流しながら、『自分はどうかだったのか…』と考え、発言することが求められた2日間だった。慣れない活動の連続で疲れ果てたが、気がつくと終わってしまったような充実感があった。はじめてのラウンドテーブルを衝撃的に、そして有意義に過ごすことができた。

土曜日のポスターセッションでは、まず教育研究所の研修システムについて話を聞いた。私は長野県からの派遣教員として福井に来たばかりであり、福

井教育の良さを探りたいという願いがあった。この3ヶ月間、福井の先生たちに混じって働く中で、充実した職員研修に興味を持つようになった。そんな私にうってつけのポスターセッションだった。説明を聞きながら質問できる機会は大いに参考になった。後半はレジャ＝エミリアの幼児教育について話を聞いた。中学校とは分野が異なるが、幼児教育の狙いに共感できる部分が多かった。レジャ＝エミリアでは、教育サポートのために地域や企業が協力するシステムができあがっているという。振り返って、自分自身はどのような考えを持っていたかと言えば、

地域と協力しようという意識は希薄だった。また、企業に教育の一環を担ってもらおうと考えたことは無かっただろう。優秀な若い人材が必要なのは地域・企業であり、教育へと力を貸してもらえる可能性は大きいのだと気づかされた。土曜日、日曜日で何度も感じたことだが、自分の知識は狭く、新しい世界は大きく広がっていることを痛感した。見聞きすればするほど、この先に活かしたい発見をすることができた。レジャ＝エミリアの幼児教育も、それを感じさせてくれたものの1つである。

私が参加した「Zone D 授業」では、実践発表を聞き、グループセッションを行った。うしく小学校も附属中学校も、どちらもアクティブラーニングを目指す興味深い実践発表だった。それと同時に、発表を受けてグループでセッションを行い、1人では考えつかないような新しい発見をすることもできた。セッションの主なテーマはアクティブラーニングの実践についてだったが、話し合う中でいくつかの疑問が出てきた。例えば、「グループ学習」とよく言われるが、今求められているのは、「チーム」として課題を解決する力ではないかという話題が出た。グループ学習では得てして役割を決めて活動することが多い。その一方で、チームで取り組むときには、お互いに意見を出しながら解決策を探っていくものになる。自分自身も発表の準備をさせるためにグループ活動をしていた場面もあり、大きく反省した。会の最後にはディープ＝アクティブラーニングを実現するために

あるべき教師の姿…という疑問が話し合われた。話題は尽きなかった。次回のラウンドテーブルで更に深まった話し合いができることを今から期待している。

2日間で一番刺激を受けたのが日曜日のラウンドテーブルだった。大学生から教育研究所の研究者の方まで、また6人中3人が福井県外からというグループだった。発表も、先進的な総合の実践、大学で行う探究活動、福井県の高次教育の変革、と多種に及び、そのすべてがとても興味深い内容だった。総合的な学習は自分の苦手分野でもあり、質の高い実践を教えて頂き大変参考になった。特に、先生が生徒たちの失敗を恐れず、ときには失敗から気がつかせようというスタンスを貫いて指導をされていたことに感動した。生徒を目の前にすると、すぐに注意をしてしまう自分に欠けた部分だと感じた。総合から得た経験を活かす生徒たちの姿を聞き、自分も総合的な学習をもっと取り組んでみたいという想いになった。それに加えて大学生の実践のレベルの高さを聞いたり、福井県の数学教育がどう変化しようとしているのかを聞いたり、盛りだくさんで充実した時間を過ごすことができた。

多くの刺激をラウンドテーブルで受けた。新しいものに出会えただけでなく、自ら実践したいと思う原動力も得た。ラウンドテーブルを「なるほど」で終わらせず、新しい一歩を踏み出す機会にするべく、今後のカンファレンスも頑張ろう…と決意を新たにしている。

ラウンドテーブルに参加して

スクールリーダー養成コース 1年／坂井市高椋小学校 名倉 康浩

「つながる」、話がつながる、思っていることがつながる。そう感じたのは、初めてラウンドテーブルに参加した2月、教職大学院に入学する前。

同じテーブルを囲んだメンバーは、ほとんどが他県の方で、大学の教授、附属高校の先生、教育委員会の方、中学校の先生・・・と、全く立場の違う方ばかりだった。最初にメンバー表の肩書きを見て、共通の話題があるのだろうか、話について行けるだろうか、と不安に思いながら席に着いた。

報告者の話を元に、意見交換が進んでいくと、「分かる」「あるある」と、同調する部分が出てきた。昼食時間も話が弾むほど和やかな雰囲気になった。話し合いを終えると、共通の認識をもてた充実感が大きかった。校種や地域環境は違っても、大事だと考え

る点や必要だと考える事柄を共有できたことは、もっと学びたいという意欲につながった。

そんな良いイメージをもって、今回のラウンドテーブルに参加した。1週間の勤務を終えて迎える週末だったが、期待感が大きく、楽しみにして会場に向かった。

セッションⅡでは、ZONE B 「教師」に参加した。

シンポジウムでは、文科省が取り組む課題や日本教育経営学会から示される校長の専門職基準についての意義等の話を受け、「子ども主体の風土をつくる」ことについての意見交換を聞いた。

その後のフォーラムでは、「福井県の風土は他県と違う」という、宮下先生の切り出しから、福井の風土についての話が中心となった。

他県から見ると、福井の良さを感じる点がたくさんあるという。私自身は福井しか知らないのですが、日頃のありのままの様子を語ると、そこに良さを見いだせるようである。職員同士での助け合いや学び合いができていように映るようである。また、福井の教職大学院の良さについても確認された。ここ2年で全県に教職大学院ができるということで、富山大の新多先生は、大きな関心を示されていた。福井に教職大学院ができて、結構な年数が経つが、その効果が浸透し始めているというところもあつた。とても恵まれた環境に自分がいることを実感した。是非、こうした学びを深めながら、自分自身と勤務校全体、強いては地域全体がレベルアップできるように努めていきたいと思った。

セッションIVでは、小グループで実践の展開を聞き合った。今回は、札幌大通高の実践や福大附属中の研究組織と研究の概要が紹介された。大通高は、渡日帰国生徒をはじめ、様々な背景をもつ生徒や、年齢や生い立ちがいろいろな人達が通う、地域に開かれた

学校である。自己表現の場を確保することで、一人一人の自己有用観を高めようとする取り組みは、年々幅を広げ、壮大なプロジェクトであつた。

附属中の報告では、長い歴史の積み重ねの上に、しっかりと形が整った研究組織や授業の展開、研究会などの実践が繰り返されていると感じた。メンバーでいろいろな話をする中で、私自身が強く感じたのは、「子どもを見取る」というスタンスや意識が、附属中の先生方に浸透していることが大きく、それが根底にあることで、研究や日々の活動も上手く進んでいるということである。そして、このことは、大通高の実践を支える熱意ある先生方にも共通していることのように感じた。また、自分の勤務校のような公立の小学校においても、教師自身が「子どもを見取る」という共通のスタンスをもつことが必要で、そうすることで、学校全体の教育効果は上がると感じた。全く立場の違う方々の話が、自分の勤務校も含めて、「つながった」と感じる、とても有意義な時間であつた。

実践研究 福井ラウンドテーブル 2015 Summer Session に参加して

スクールリーダー養成コース 1年/福井県立高志高等学校 西 繁寿

6月のラウンドテーブルは、金曜日のプレセッションにはじまり、「ポスターセッション」、ゾーン別の「シンポジウム」・「フォーラム」、 「クロスセッション」と進んでいった。

ラウンドテーブルには4重の意味が掲げられている。

- ① 長い実践の展開をもとに跡づけ、省察する。
- ② 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
- ③ 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
- ④ 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

3日にわたるプログラムは、どれも私にとって刺激的なものであつた。「プロジェクト型学習の生徒発表」、「力強く進む教育改革」・「教師の学び」、「生き生きと活動する子どもとそれを支える「チーム学校、地域、公民館」」。そのようななか、福井県の学校をいくつも訪問されたという先生の一言が、今も頭を巡り続けている。「私の訪れた福井の学校はどこも、派手さはないが考えさせるところをしっかりと考えさせる授業が行われていた」。

学力・体力とも全国トップと言われる福井の教育。1時間1時間の授業に、当たり前のこととして注ぎ込まれる多くの知恵と工夫・努力。一見地味に見える

毎日とそれを支える教員集団の学び合い高め合い。この積み重ねこそが「チーム福井」の強みなのだろう。

この3日間、様々な視点から教育について考える機会をいただいた。校種や職種を超えて全国の方々と話す機会をいただいた。教育を取り巻く環境が劇的に変化していることを肌で感じ、これからも変化していくことを現実の問題として捉えることができた。自分では当たり前だと思っていることも別の視点から見ると当たり前ではないのかも知れないし、今は当然のことであってもこれが続くとは限らない。何気ない毎日のなかで、生徒は変化し成長していく。何気ない日々の生活の中にもこそ大切なものがあふれている。これらをどのように捉え、活かし、高めていけるか、われわれ自身の価値観と理念が問われている。

ラウンドテーブルで知り合い語り合った方々は、それぞれが置かれた場所・立場で、能動的に動き、湧き出てくる課題と正面から向き合っている。私のまわりにも、日々、問題意識を共有し、密に意見交換をしともに教育に取り組める同僚がいる。「チーム学校が日々学び続け成長し続けられるか」「生徒の成長をどう捉え、そこにどう関わるか」「われわれ自身の理念・信念」。それをまっすぐ胸に突き立てられた3日間であつた。

語り合い、聴き合い、学び合う

～ラウンドテーブルに参加して～

スクールリーダー養成コース 2年／啓新高等学校 墨谷 宰

2015年6月26日～28日の3日間、「実践研究 福井ラウンドテーブル2015 Summer Sessions」が開催された。毎回感じるのだが、このラウンドテーブルには大きな特徴がある。参加するすべての者が実践者及び研究者であるということ。地域も職種も異なる者同士が、それぞれの分野での実践のプロセスを語り合い、聴き合い、学び合う時間と空間が確保されているということ。実践者や研究者にとって、まさに夢のような場所がこのラウンドテーブルである。

慌ただしく多忙な毎日を何とかこなす日々の中で、立ち止まり、自らの足跡を振り返り、その意味を捉え直してみる。それができるラウンドテーブルは、私にとって何よりの“癒し”である。毎回私に「これまでの自分は間違ってたなかった」「自分は独りじゃない」

「また明日からがんばろう」と思わせてくれる。自分のすべてをさらけ出して熱く語り、相手のすべてを受け入れるつもりで丁寧に聴く。その日初めて出会った者同士が、語り、聴き合った後は大切な仲間へと変わる。自分が語った実践が、その仲間たちの手でそれぞれの場所へ持ち帰られ、誰かにとっての刺激や実践のヒントとなる。本当に素晴らしいことである。

開催にあたりご尽力いただくすべての方への感謝を忘れず、これからも参加させていただきたいと思う。加えて、さまざまな分野の方にこのラウンドテーブルの意義を理解いただき、今後さらに素晴らしいものになっていくことを心から願う次第である。

スタッフ 紹介

三田村 彰



平成27年4月から教職大学院で勤務している三田村彰です。私は実務家教員であり、3月までは、公立学校教員として福井県教育委員会に勤務しておりました。その

ため、専門領域は教育行政マネジメントということになるのですが、その専門性は決して広いものではありません。私の場合、行政経験の大部分が人事部門でしたので、教職員の採用、研修、管理職選考など、人事の立場から学校教育を眺めてきたにすぎませんが、長期にわたり教育行政を経験したことにより、多くのことを学ぶ機会を得ることができました。今回は、行政経験から学んだことをお話しして自己紹介にしたいと思います。

まず、教育庁教職員課時代の経験からお話をしたいと思います。私は、教育職員免許事務を担当してい

みたむら あきら

ました。皆さんも御存じのとおり、教員の免許は教育職員免許法に基づいて、各都道府県教育委員会が授与する仕組みになっています。この教育職員免許法という法律が大変な曲者で、本則で規定されている条文が、施行規則の例外規定により大きく変更されるなど複雑怪奇な法律です。文部科学省関係の法律の中でも、この教育職員免許法と著作権法は難解な法律のトップを争うものだと言われています。この難解な法律と闘いながら、県内の大学などから提出される免許申請書類を審査し、合格した方に手書きで教育職員免許状を授与していました。平成になっても、毛筆で書かれた免許状が発行されていたなんて驚きですね。もちろん、免許状の原本もすべて手書きの時代です。

この時、阪神淡路大地震が起こり、関係する教育委員会では、教育職員免許の原本を含む多くの重要な資料が失われたことから、災害時の資料保管の問題が議論されました。私の仕事では、教育職員免許の原本が最も心配でしたから、すぐに各都道府県の情報

収集を始めたところ、多くの教育委員会が教育職員免許データをコンピューターを利用して複数管理する方向に進んでいることがわかりました。すぐに検討を始めましたが、本県独自のシステムを作っても、法律改正の度にシステムの変更が必要となり膨大な費用がかかることがわかり、半分あきらめかけていました。このとき、予算担当者や企業担当者とチームで仕事を進めることにより、先行している教育委員会のノウハウを利用して開発費用を抑え、法律改正のシステム変更も全国の教育委員会と共同で行う方法が浮上しました。この選択によりわずか2か月で予算要求にも目途が立ち、過去の膨大な原本をデータ入力する方法も、文部科学省とのネットワークで、国の予算の中にデータ入力のための人件費があることを教えてもらい、キーパンチャーを雇用して2年でデータ化することに成功しました。その後、文部科学省が免許更新制度のスタートのため、全国共通の教育職員免許システムを導入することになりましたが、本県が利用しているシステムと共通システムとなり安心したのを覚えています。

このような経験から、非常に困難な仕事でも外部の専門家とチームで仕事を進めることにより短時間で解決策を見つけることができることを学びました。さらに、全国の状況を俯瞰することの大切さも学びました。自分の県レベルでものを考えていると、全国の動きに対応できないことがはっきりと見えてきます。むしろ、先行する地方の動きが全国の動きをリードする時代に来ていることを実感しました。

次に、教育庁高校教育課時代の経験からお話しします。国の会計検査院が特別支援教育調査のため、初めて養護学校に実地検査に入ることが決まりました。会計検査院は、国の予算が使われている機関を法律に基づいて調査する強い権限を持っていますので、たいへん緊張します。私は、会計検査院の担当者がどのようなことを質問するのか不安を持ちながら学校に同行しました。会計検査院の最初の質問は、「養護

学校で、教員以外の職種としてもっとも必要性がある職種はなにか。」でした。私にとっては予想外の質問であり、どのような答えをすべきか躊躇しました。そのとき、養護学校の校長は「看護師の資格をもつ職員が必要です。」と自信を持って答えたのです。会計検査院は「なるほど、外部の専門家を学校に入れる必要があるわけですね。」と返したのをはっきり記憶しています。まさに、「チーム学校」を先取りするような質問でした。会計検査院がこのような新しい視点で学校教育を考えていることに非常に驚かされました。

私は、養護学校に看護師を必要としている理由がよくわかっていませんでした。すぐに特別支援教育担当の指導主事に話を聞くと、養護学校内で経管栄養や痰の吸引など看護師の資格を有する者がいないと許可されない医療的ケアの必要な児童生徒の増加が背景にあることを知りました。なんとかして養護学校への看護師配置を予算化できないか、その日から特別支援教育担当の指導主事と一緒に資料作りが始まりました。2人で財政担当課に提出した資料は200ページを超えました。そして、医療的ケアの様子を財政担当者に理解してもらうため養護学校にも何度も足を運びました。苦労の連続でしたが、2月議会で全国に先駆けて県レベルで看護師の配置を進めることが認められ、3月には知事の記者会見で発表することができました。

この経験から、学校のニーズを十分把握して教育行政を進めることの大切さを思い知らされました。また、財政担当者が必要とする資料の作り方、県民の代表者である議員に対するわかりやすい説明、教育長や知事に対してのプレゼン方法、マスコミへの取材対応など行政の基本を身につけることができました。

今回は、私の数少ない成功体験から学んだことをお話ししましたが、実はその何倍もの失敗体験があります。これからの授業の中では、この失敗体験から学んだこともお話をしていきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願ひします。



永谷 彰啓 ながたに あきひろ

昨年度から登録はされていたのですが、実質的には今年度から本格的に仕事をさせてもらっています。普段の活動としては、教職大学院の拠点校や連携校の学校に行き、研究授業を参観したり、研究会に参加したりしています。各学校の授業の雰囲気、子どもたちの様子、研究への取り組み方などが分かって、とても勉強になります。

月に1回、現職の教員やストレートの大学院生が集まってきて、実践の紹介をしたりしています(月間カンファレンス)。毎回グループ討議をするのですが、グループのメンバーが毎回変わるので、いろいろな人のいろいろな実践を聞くことができます。年に2回ほど県内外の先生方が多数参加されて、実践発表やシ

気、子どもたちの様子、研究への取り組み方などが分かって、とても勉強になります。

ンポジウムなどを実施し、グループ討議で実践を語り合うような会もあります(ラウンドテーブル)。

また、スタッフの力量を高めるために、週に1回火曜日の夕方、教職大学院のスタッフが集まって研修会もします(火曜FD)。実践書の分析をしたり、学校訪問の様子を話し合ったりします。さらに、年に1回「教師教育研究」というテーマで、論文を書くことも課題として課せられています。

<学校訪問>

教職大学院のスタッフには、拠点校や連携校になっている学校の担当校というのがあります。その担当校への関わりがとても勉強になります。私は、福井大学附属小学校、福井市中藤小学校、鯖江市豊小学校、坂井市春江小学校、坂井市高椋小学校を担当しています。研究授業を参観したり、研究会に参加したりしています。附属小学校や春江小学校、高椋小学校には以前に勤務していたこともあり、その頃のことを思い出しながら、それぞれの学校の研究の進め方、子どもたちの様子、研究授業への取り組み方など、いろいろな勉強をさせてもらっています。研究授業を見ても楽しいし、参観の仕方もある他の教職大学院の先生方の見方がとても勉強になります。授業を看取る、子どもを看取るということが、実際にどんなことなのかを教えてください。

<月間カンファレンス>

月間カンファレンスとは、月に1回(基本的に土曜日)教職大学院生が集まって、いろいろなことを語り合います。現職の先生方はもちろん、インターンシップで各学校に行っているストレートの院生も参加します。全国的に有名な学校の実践書や理論書を読み、それらをどう見るかを話し合います。また、自分の学校や授業の実践を紹介したりもします。それぞれの学

校の様子が聞けるので、とても楽しみです。先生方が各学校でどんなことに取り組み、どんなことに悩んでおられるかを語りあいます。いろいろな校種の先生方のいろいろな実践を聞くのがとても楽しみです。また、県外の学校から県内ばかりでなく県外の教育事情も分かって、とても面白いです。

<ラウンドテーブル>

ラウンドテーブルという大きな会合が年に2回あります。6月と2月に行われます。4つのゾーンに分かれていて、実践発表ありシンポジウムあり、グループ討議ありと盛りだくさんの企画です。県内外から多くの先生方が参加されます。いろいろな学校の先生方の実践を聞き、話し合います。学力・体力がトップレベルの福井県、今後の福井の教育の方向性を探っていくためには、とても大事な機会だと思います。まだまだ多くの特に県内の先生方に参加していただきたいと思っています。

<火曜FD>

毎週火曜日の午後4時から、教職大学院のスタッフ会議があります。スタッフ自体の力量を高めるファカルティ・ディベロップメント(FD)です。実践を読んでレポートを書いたり、学校訪問の様子を報告したりします。実践レポートを書いたり、報告書を作ったりすることはなかなか大変なのですが、いい勉強をさせてもらっています。

教職大学院の先生方の中には、いろいろな専門の先生方がおられます。文科省の行政におられた先生、長野県の指導主事をされていた先生、日本語の講師をされている先生、それらの先生方からいろいろなことを勉強できます。

こうして、教職大学院の非常勤講師として、福井県の教育に関わっていることに感謝し、少しでもお役に立てればよいなと思っています。

渡邊 淳子



今年5月より教職大学院准教授として着任いたしました渡邊淳子です。

これまで31年間、公立の学校で勤務してきました。2014年に福

井大学教育地域科学部附属小学校に転任して、2年目

わたなべ じゅんこ

を迎えています。長い小学校教員生活の中では、高学年を担任することが多かったのですが、久しぶりのやっと2回目の1年生担任でした。1年生は慣れた高学年とは違った難しさがあり、何もかもが新しく、そういった意味で自分が積み重ねてきたことをとらえ直すいい機会になったように思います。が、何年生であっても、子供たちが感動を私にくれる存在である

ことには違いありません。子供たちと共に過ごす時間の何と楽しくありがたいことか！！

授業がうまくいくかいかないか、満足のいく授業になるか、これが日々の健康にも関わるくらいの一大事です！「昨日の授業はあれがダメだった」「この授業はこれが失敗だった」…毎日、毎時間、失敗しながらもほんのちょっとの成果を励みに続けてきているといっても過言ではありません。『どうしたら、いい授業ができるのか』—これは教師たる私の永遠のテーマであり、日々痛恨の悔し涙と汗を流しているからこそ、明日へ明日へとかすかな希望をつないで、今日まで来ることができたのかもしれない。

いい授業って、どういうのがいい授業なのか、常に考え模索していく中でやっとこの年になって見えてきたものもあります。若い時は、45分という時間の中で指導すべきことを、落ちなく、無駄なく、効率よく、全て教え切ることが美しい授業、いい授業と考えていた自分がいました。加えて、大河の流れのようによどみなく流れる授業をよしとしていたようなときもありました。全ての子供たちが一斉に正答にたどり着く授業を真剣に求めていたこともありました。しかし、どんなに準備物を完璧に用意し、シミュレーションを繰り返しても、思った通りに45分は展開せず、必ず子供たちの自由な発言によって横道にそれ、大事なことをたまに押さえ忘れ…、学力(テストの平均数値的な)がベテランの先生に比べると、ついていけないのは何故だろうと悔しがっていた時期もありました。苦し紛れにありとあらゆる手だてでベテランの先生方の技をまねてやってみたことも限りなくあります。しかし、失敗してはアレンジし、アレンジしては別のことを試すといったような試行錯誤の歴史が今の私を形成しているのだと思うと、なにやら努力や悪戦苦闘してきた自分が愛しくもあり、きちんと経験を積み上げていくことがいかに重要であるかを改めて痛感しています。

今の私が求めている授業とは、真の意味での子供がつくり出す授業です。子供自身が学びたいと願い、

子供自身が学びの道をひらき、子供自身が自分の生き方をも探る授業です。たとえ子供であっても、自分の生き方をしっかりと見つめ考えていく姿勢をもってほしいと願うからです。強くたくましく、楽しく、豊かに、言葉を尽くせば限りありませんが、責任をもって自分の人生を生きていこうとする子供の姿の一端を授業でみとることができたら、満足です。授業とは、子供を育てることにほかならず、教師とは「子供を育てる」のが仕事なのです。

先日、家のリフォームのためいろいろなものを整理・整頓していた際に、これまでの卒業生からのコメントを見つけ、しみじみ見入ることがありました。(もちろん、全て保管してあります。)その中に、いくつも「先生が担任でよかった。」「毎日授業がおもしろかった。」「先生と過ごしたクラス、二年間を忘れません。」「教えてもらったことを中学校に行っても忘れず、がんばります。」などという手紙がありました。私の頭の中は、瞬時にその時代にタイムスリップしました。懐かしい日々と時間が昨日のことにように、それぞれの学年についての様々な思い出が懐かしの涙と共に、心になだれ込んできました。その時、私は恥ずかしくもありながら、子供たちへの感謝の念も強くもつことができました。過去、私の前にいてくれたこの子たちの分まで、その子たちにしてあげられなかった分まで、明日からまた精進し続けなければならないと心に刻んだ時間でした。

私これから何かできるとすれば、日々の教育の中で悩める先生方といい授業をつくるにはどうしたらよいか一緒に考え、やり続けていくことかもしれません。あくまで授業にこだわり続け、子供を育てることに力を注ぎ続けることしかできません。そのためには、もちろん、自分自身がまずもっともっと学ばないといけないことは疑う余地がないようです。力不足で何事も十分にできませんが、どうぞ温かい目で見てください、ご指導をいただきますようよろしく願いいたします。

院生 紹介



北村 仁志 きたむら ひとし (高浜中学校)

はじめまして。今年度より教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました北村仁志です。現在、高浜町立高浜中学校に勤務しており、今年で2年目となります。数学科の教員として、新採用から中学校8年間、小学校8年間の勤務を経て現在に至っています。その間に多くの先生方と出会い、児童生徒との係わり方や各教科の指導方法など、知識や経験の少ない私にたくさんの方の事を教えていただきました。また、児童生徒とともに日々を過ごす中で味わってきた数々の感動や喜び、悩みなどはどれも掛け替えのない思い出であり、今の自分の原動力となっています。

現在勤務している高浜中学校は、私の母校であり、教員人生をスタートさせた新採用校でもあります。その母校に再び勤務できることに何か運命を感じながらも、私自身が中学生だった頃や新採用当時の頃のことを懐かしみながら、日々教育活動に励んでいます。気がつけば、教員生活も今年で18年目。職員室には若い教員が増え、今では学校の中堅教員として、自分のことだけではなく、学校全体のことを考えていかなければならない年齢となりました。さらに、今年度は研究主任を任せられ、ますますスクールリーダーとして取り組んでいかなければならない立場になりました。しかし、どうしていくとよいのか分

からず、あれこれと迷いながらスタートを切った4月でした。

さて、教職大学院に入学し、これまでに何度か合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加させていただきました。その中で、異校種、異業種の方々、また県外から福井県に来ておられる先生方と、互いの現状や課題について話し合い、検討し合うクロス・セッションを行いました。他校の実践を聴いて学んだり、逆に自分の悩みに真剣に耳を傾けてくれたりと、とても有意義な時間を過ごすことができました。入学した当初は、とても緊張しながら自分の取組について話していましたが、いつしかこのクロス・セッションがとても楽しい時間を感じるようになり、何とも言えない安心感や充実感に包まれるようになりました。そして、今後の教職大学院での活動やたくさんの方との出会いがとても楽しみになりました。いろいろな方々と出会い話すことで、自分の視野が一層広がるとともに、普段の自分自身の取組を冷静に振り返ることができるよい機会となっています。これが、教職大学院での学びであり、よさの一つであると感じました。

これからも、まだまだ多くのことを学んでいかなければなりません。教職大学院で様々なアドバイスや刺激をいただきながら、学んだことを本校の教育活動に還元し、より質の高いものにしていきたいと思っています。2年間、どうぞよろしくお願い致します。



マグラブナン・ポーリーン

Pauline Anne Therese M. Mangulabnan (附属中学校)

はじめまして。私はマグラブナン・ポーリーン・アンアテレーゼマラヤです。ポーリーンと呼んでください。フィリピンから来ました。フィリピンではデラサール大学の数学教育の教師とリーローズスクールの中学高校の管理職でした。今は、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コー

スの一年生です。また、附属中学校の職員でもあります。私は日本の教育制度を学ぶために、日本の教育文化を経験し、日本人の文化に溶け込みたいです。これが日本の教育を学ぶ最善の方法だと考えています。また、私の経験を活かして一緒に働く人たちにも貢献したいです。どうぞよろしくお願い致します。

私は子どもと関わることと数学が大好きだったので、大学生の時に数学の先生になることを決意しま

した。数学の知識は人々の人生をより良くすると思います。また、数学は問題を解決するために暗記が必要ないので小さい頃から好きです。さらに、数学は問題に対して、それぞれの学習者に独特の異なる解決法がある可能性を秘めています。それゆえに、数学は暗記に頼ることなく様々な発想を生み出す自信を私につけてくれました。私にとって数学学習の最高の瞬間は、新しい発想が難しい問題の解決につながった時です。この感覚を、現在、将来にわたり生徒たちと分かち合いたいと思っています。

この感覚を授業で生み出すために、私には生徒と共有する三つの原則があります。一つ目の原則は、「数学は数学を感謝する学生によって深く学習される」です。生徒は少なくとも三つの場面で数学に感謝することができます。1)実生活や様々な状況において数学を適応する方法を学ぶ時、2) 法則を見つけて何か新しいものを発見するようなスリルを経験する時、3)数学が問題解決においてどのように役に立つか学ぶ時です。数学の持つ力への感謝は、生徒が数学をより良く学ぶのを助けるでしょう。したがって、数学教師の最初の目標として、生徒に数学を感謝してもらうことが最も大切です。

二つ目の原則は「数学の授業は、生徒に自身の学習を考え（メタ認知）、学習の進捗状況やレベルを分析する機会があるように設計すべきである」です。数学の目標は生徒の論理的思考の育成です。それを達成するためには、生徒の思考に応じた支援をしなければなりません。例えば、私の授業では、「あなたは別の方法でこの問題を解くことができますか?」「この問題のどの部分であなたは混乱しているのですか?」「条件を変えたら、答えは何になりますか?」「解法を同級生に説明するならば、あなたはどのように説明しますか?」などの質問を投げかけます。自分の弱みと強みを知れば、生徒は仲間と協同して学ぶことができます。

3つ目の原則は、「数学教師は生徒に質問する姿勢と質問力を促す努力をすべきである」です。数学の授業で生徒が自分自身の疑問を質問し、疑問点を解決できるようにする必要があります。しかし、生徒達が正しく導かれないのであれば、解決への道のりは簡単なものではありません。数学教師は生徒達が自分達なりに思考できるように、ヒントを与えたり質問をすべきであると思います。

私はこれまでの経験から学校の本質を学びました。それは、教師の質と性質が学校の最も重要な要素を占めるということです。カリキュラムの施行、生徒と保護者の対応、学校文化と評判は教師次第でもあるのです。したがって、教師がひとつのチームとして機

能しない場合や、教師が自身を取り巻く環境に満足しないのであれば、学校運営は成功しません。幸せな教師は幸せな生徒を生み出すことができます。知識と分別がある教師は思慮深い生徒を輩出することができます。目標のある教師は学ぶ姿勢がある生徒を生み出し、学習する組織をも生み出すと思います。

Good day. I am Pauline Anne Therese M. Mangulabnan. I am from the Philippines. In the Philippines, I used to teach Mathematics and Mathematics Education at De La Salle University Manila. At the same time, I was working as a Secondary School Principal at Lilyrose School. Currently, I am a first year graduate student under University of Fukui's Department of Professional Development for Teachers (DPDT) School Leader Course. Also, I am assigned to teach in Fuzoku Junior High School. I wish to learn about Japan's Education System, to experience first hand Japan's educational culture, and to be immersed in the Japanese way of living. I think that this is the best way for me to learn and to hopefully be able to contribute, too, to the people I am working with. I am indeed pleased to meet you.

I decided to be a mathematics teacher because I enjoy mathematics, I like dealing with kids, and I think that mathematical knowledge can make people's lives better. I like mathematics because I do need memorization to learn or to be able to solve a problem. Moreover, in mathematics, it is possible to have a variety of solution for a single problem – each one unique to the learner. Hence, this attribute of mathematics developed my self-confidence when I was younger; I realized that I am capable of thinking and creating my own learning. For me, the best part of learning mathematics is that moment when one sees how different concepts connect whenever a new idea is realized. This is the feeling that I want to share with my students before, now, and in the future.

For this to materialize inside the classroom, I have three major principles that I share with teachers and/or practice with my students. The first principle is that mathematics is deeply learned by students who appreciate the subject. Students can appreciate mathematics in at least three ways: 1) when they learn how to apply mathematics in real life or in various situations, 2) when they experience the thrill of finding patterns and discovering something new, and 3) when they learn how mathematics can help them in problem-solving. The appreciation of the beauty and power of mathematics will help them to learn mathematics better. Thus, it is very important that the first goal of a mathematics teacher is to make students appreciate mathematics.

The second principle is that a mathematics class should be designed in such a way that students will have an opportunity to think of their own learning (metacognition) and analyze the

progress and level of their learning (reflection). The goal of mathematics is for the students to develop their own way of thinking which should be logical and clear. And for this to be achieved, students should be guided accordingly. For example, in my class, my students answer questions like, 'How can you solve this problem in another way?' 'Which part of the lesson is most confusing for you?' 'If I change the given, what will happen to the answer?' 'If you will have to explain to your classmate your solution, how will you do it?' Once a student knows his weaknesses and strengths, then the student can also learn well with his peers.

The last principle is that a mathematics teacher should teach and encourage the art of questioning. Students in a mathematics class should be able to ask their own questions and discover

things for themselves. But the road to discovery is difficult to achieve if the student is not guided accordingly. A math teacher should be able to provide questions or subtle hints that will enable the student to think on his own without spoonfeeding.

As a school principal, I have learned that the quality and disposition of teachers constitute the most important aspect of a school. The implementation of the school curriculum, the handling of the students (and their parents), the school culture and reputation heavily rely on the teachers. Hence, if they do not work as a team or teachers do not feel satisfied with their environment, the school will also suffer. A happy teacher makes a happy student. An informed teacher creates a thinking student. A teacher with a vision produces a learning student and a learning institution.



宮本 泰成 みやもと やすなり (附属小学校)

今年度、スクーラーリーダー養成コースに入学しました宮本泰成です。福井大学教育地域科学部附属小学校での勤務3年目となった今年度は、5年

生担任・生徒指導を担当しています。

本校では、「聴き合い つながりあって 学びを深める授業をつくる」を研究主題として、同主題の2年目となる今年度は、「学びを深める」子どもの姿を明らかにした上で、「学びを深める」ための「聴き合い、つながり合い」に焦点をあて、①「学びを深める」授業づくり・②「学びを支える」環境(集団)づくり・③「学びを実感する」自分づくりの3点に重点をおいて研究に取り組んでいます。個人的には、専門である社会科をはじめ、「生徒指導の基本は、まずは授業・・・。」とも言われますが、授業外での生徒指導の面からも本校の研究を支えられたらと考え、日々、実践と提案を行っています。

さて、本当に早いもので、今年度、教職20年目を迎えました。初任校の敦賀市栗野小学校を皮切りに、これまで、同市赤崎小学校、坂井市(当時:坂井町)大関小学校、福井市東安居小学校、在外教育施設のジェッタ日本人学校(サウジアラビア)で勤務してきま

した。これまでを振り返り、思い出されるのは、どれも、関わってきた子どもたち・保護者や地域の皆さん、よき先輩&同僚教員とのエピソードばかりです。「独身寮にクラス全員が寝泊まりして行った夏合宿」や「学校校庭でのキャンプ」、親子の集いで「巨大流しそうめん」や「登山」、先輩方との濃密!!な「寮生活」、そして、もちろん「子どもたちとの思い出深い授業」の数々・・・。こう考えると、やはり、何かをしようとする原動力・行動力の源となっているのは「人との出会い」なのだと改めて感じます。

今回、教職大学院に入学し、月間カンファレンスなどを通して、県内外の様々な学校・教育機関で日々研鑽に励んでいる先生方、やる気に満ちあふれた新進気鋭のストレートマスターの学生の皆さん、そして、教職大学院の先生方と、日々の実践やお互いの教育観を語る貴重な機会を得ることができました。毎回、あまりに濃密な時間過ぎて、やや消化不良気味ではありますが、これらの“新たな出会い”をもとに、また、次の一步を踏み出せそうな気がしています。中学校時代の憧れの恩師が下さった言葉「地道に、 $\pi\pi$ (こつこつ)努力すること」を胸に、この1年間、これまでの自分の歩んできた道のりをしっかりと省察&意味づけしながら、次なる可能性を探っていきたいと思います。みなさんどうぞよろしくお願いいたします。



飯田 吉則 いいだ よしのり（附属小学校）

今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました飯田吉則です。現在、福井大学教育地域科学部附属小学校に勤務しています。在籍

3年目で2度目の3年生担任をしています。これまで金津中学校、尚徳中学校、勝山中部中学校と16年間中学校での勤務でした。自身初の小学校、しかも研究校での勤務となり、戸惑いながら過ごす日々です。この教職大学院で学んだことをいかしていきたいと思っています。

教職大学院で感じたことは多くの人、そして言葉との出会いがあるということです。昨年度の事前履修から約1年がたちますが、すでに30名以上の方々と実践を語り合う機会を得ることができました。県内外、様々な校種、職種の方々と語り合いでの実

践の省察、また、他の実践を聴く中で自分の考えが深まっていくのを実感しております。

さらに、これまであまり接することのなかった新しい言葉との出会いもありました。特に心に残っているものは夏季研修でテキストとなった『コミュニティ オブ プラクティス』の原題『Cultivating Communities of Practice』の『cultivate』という単語です。この意味は多岐にわたっており、『〈土地を〉耕す、耕作する。〈作物を〉栽培する。〈才能・品性・習慣などを〉養う、磨く、洗練する。〈文学・技芸を〉修める、錬磨する。〈人を〉教化する、啓発する；〈人に〉教養をつける。〈芸術・学術などを〉奨励する、〈…の〉発達に努める。〈知己・交際を〉求める、深める。〈人と〉親しくなろうとする、交際を求める。』などがあります。まさに教職大学院そのもの、学校そのものを表す単語だと勝手に解釈しました。今日も放課後、授業の後始末・準備をしながら「cultivate, cultivate」と心の中でつぶやいています。



大橋 武史 おおはし たけふみ（附属小学校）

今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学いたしました。教員になって13年目になりましたが、初任者からの

6年間は特別支援学級担任をしておりましてので、通常学級担任としてはまだ6年の経験しかありません。最近では「中堅」と呼ばれることも多くなりましたが、通常学級担任としてはまだまだ駆け出しで、周囲の先生方のご実践を参考にしつつ試行錯誤する毎日です。現在、福井大学教育地域科学部附属小学校で4年生の担任をしております。本校での勤務は4年目となりました。本校の研究テーマを踏まえ、ここでの3年間は造形科（図画工作科）の研究を進めてきました。他教科等とのつながりを重視し、特に総合的な学習の時間とリンクさせて学習活動を展開し、児童の課題に対する意識を高めたり、その知識を活用しながらアイデアを出して制作を進めたりする児童の姿を追ってきました。今年度も、引き続き造形科での授業実践を行っています。

2年前に10経年研修を終えましたが、5経年、10経年と様々な世代、異校種の先生方とのクロスセッションの研修を経験しました。小グループで実践

を語り合い、相手の話に耳を傾ける中で、これまでの自分の経験を語り、振り返ることができました。最近、ようやくこれらの研修の意味が分かるようになってきました。これも2年前の話ですが、福井大学のラウンドテーブルに初めて参加させていただいた時、不思議な感覚を味わったことを今でも鮮明に覚えています。自分とはまったく違う職種、校種、世代であっても、語り手の思いや熱意を感じると、自然と共感できる部分や自分の経験と重なる出来事が次々と湧き出してくるのです。語る中で、そして聴く中で、自分の実践を豊かに振り返ることができました。これが「省察」の意味なのであろうと、その時感じました。4月の合同カンファレンスの際にも似たような感覚を味わいました。教職大学院で学ぶ意義も、まさにそこにあるのではないかと思います。

私が現在勤めている附属小学校も、このような省察の実践研究のスタイルを敷いています。本校では、一昨年度までの4年間、「協働して学びを深める授業をつくる」というテーマで研究を進めてきました。昨年度からは、本校の子どもの実態を踏まえ、これまでの「協働」という大きな枠組みの中の「聴き合い」に焦点を絞った研究にシフトしました。「聴き合い、つながり合って、学びを深める授業をつくる」をテーマに掲げ、「聴き合い」が、相互理解、自己開示、自己

理解、自己の変容といった児童の学びの深まりにどのように影響しているかを探っているところです。研究テーマの見直しを図られたことで、学校全体で多くの課題が見えた昨年度でありましたが、裏を返せば、本校の研究体制や組織についても大きな見直しの時期にきていたと考えるのが妥当であると感じます。学校全体で研究に取り組んでいくための雰囲気を生む研究組織をいかに作っていくかが、今、本校

が抱える最も大きな課題であると感じており、自分も研究部の一人として微力ながら貢献できればと日々考えています。

こうした私自身が抱えている問題を、ここで学ぶ多くの経験豊かな先生方と語り合う中で、自分自身の実践を振り返るだけでなく、教員として学び続けるという意味を自分なりに深く考えようと思っています。1年間、どうかよろしくをお願いします。



幸坂 浩 こうさか ひろし（附属中学校）

今年度、スクーリーダー養成コースに入学しました幸坂浩です。現在、福井大学教育地域科学部附属中学校に勤務し、6年目となりました。附属

中からは毎年1～2名、研究部に所属する教員がその対象として、教職大学院で学ぶ機会を得ています。しかし私は研究部に所属しておらず、油断？していたところ、教職大学院で学ぶことを勧められました。不安や戸惑いを感じましたが、迷う暇もなくいつの間にか現在を迎えています。この機会に、教員としての現在までの歩みや変革点を捉え直し、さらに教職大学院の先生方をはじめ、多くの方々と接する中で新たな視点を獲得していきたいと考えています。

さて、附属中では過日、第50回教育研究集会在開催されました。本年度も全国各地より多くの参加者を迎え、授業を公開し、子どもの学びの姿を中心に語り合う分科会の場が設定されました。保健体育科が専門の私は、例年体育分野で授業を公開してきましたが、今年度は保健分野にチャレンジしました。本校では教科分科会とは別立てで「学校保健」分科会が設定され、研究集会では養護教諭が保健分野の公開授業を行ってきました。しかし今年度は養護教諭が産

休に入られたため、保健分野を研究・実践する機会を得ました。この境遇は、教職大学院で学ぶきっかけと似ています。研究集会以外では保健分野の授業も当然担当していますが、体育分野に比べるとやや苦手意識があります。これまで授業を公開することはありませんでした。しかし今回は、自然と前向きに取り組むことができました。これまでの養護教諭が取り組まれた実践記録を読み返し、専門的な立場から見出した方向性や子どもの姿から、多くの示唆を得ることに楽しさも感じながら、研究集会の単元構想と実践に生かしていきました。

教職大学院で学ぶことに対しても、やや身構えてしまう部分がありました。しかしこれまでのカンファレンスやラウンドテーブルを通じて、学校を取り巻く現状や教育改革の展開、教員集団の在り方、そして子どもの学びなどについての見識を広めたり深めたりする充実感を味わっています。附属中では子どもたちが深く探究している姿をとらえて、「脳みそに汗をかく」という表現を使うことがあります。私も子どもたちと同様な学びを勤務校で、そして教職大学院で経験し、チャレンジ的实践と省察、そして再構成を繰り返しながら、どんなことが見出せるのか、自分自身の成長に期待しているところです。どうぞよろしくをお願いします。



佐藤 恵美 さとう えみ（附属中学校）

今年度、スクーリーダー養成コースに入学しました佐藤恵美（さとうえみ）と申します。現在、福井大学教育地域科学部附属

中学校に勤務しております。教科は家庭科です。

本校に勤務して今年で5年目になります。本校に赴任し、たくさんの先生方との協働研究の機会をいただき、授業研究に取り組んでおりますが、子どもの学びの筋で授業を考えるということが、これまでと大きく変わり悩んだことでした。しかし、これまで以上に子どもたちのつぶやきをじっくり聞いたり、じ

っくり観察したりしていると、想像以上に子どもたちが多くのことを考えたり興味を持ったりするということに、改めて気づくことができました。子どもの姿を見て、子どもたちに寄り添ったり、一歩先に行ったりしながら柔軟に授業を組み立てていくためには、幅の広い教材研究が必要だと感じています。また“省察する”ということも、これまでになかったことでした。今までは、こんな成果があったということは意識してききましたが、ここがうまくいかなかったのはどうしてだろうと真剣に考えたことはあまりなかったので、省察し改めて問い直すことで見えてくることのあることに気づくことができました。また、それを同僚の先生方に聞いていただくことで、新たな視点をもたらすことができ、次の授業につなげていくことができます。先生方の協働があってこそ、研究を進めていくことができ、改めて附属中学校に受け継がれ

ている研究体制やプログラムについて、その意味や意義を見直していきたいと思うと同時に、自分の言葉で語れるよう、発信していけるように努めていきたいと思います。

これまでの勤務校でも、学年の先生方、教科の先生方との協働があり、たくさんの先生方に支えられてきました。放課後の先生方との何気ない会話の中で、救われていたことも多かったように思います。附属中学校にきて、先生方と“語り合う”機会も増えました。教職大学院でも、たくさんの先生方と語り合う中で、刺激を受けたり、自分のこれまでの経験がつながったり、再構築されたりしています。

教職大学院で学ぶ機会をいただいたことに感謝し、先生方とのつながりを大切にしながら、学んだことを子どもたちに返していけるよう努めていきたいと思っています。よろしく申し上げます。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース 1年 藤田 芳幸

春のラウンドテーブルも過ぎ、前期残り二回となった木曜カンファレンスの日、今年初めて蝉が鳴き始めた。振り返ってみれば、厚手のコートを着てインターン先の小学校に挨拶に行った三月末のことが遙か昔に感じられる。それから約三カ月の学びの日々は、今の自分の中に生きている。

木曜カンファレンスでは、一週間の学びの振り返りと月毎の三つの企画がある。その企画の一つで、六月は「道徳」について考える月になった。今まで受けた道徳や、自分が行った道徳を振り返り、グループで道徳の授業を行い、振り返るといった内容であった。

私の「道徳」のイメージは「説教」というのがあった。なぜか。それは、自分が小学生の頃、クラスで何か問題が起こった時に教科の授業が無くされ、道徳に変えるようなことがあったような覚えがあるからだ（真偽は確かではない）。果たしてそれは「道徳」なのだろうか。

「この物語は何が言いたいのか？」グループでの話は、終始このような話であった。その物語には、様々な道徳的価値が散りばめられているように思い、どこに着目し、どう着地すれば良いのか。話し合いは悶々としていた。どうも、他所のグループも似たような雰囲気になっているようだった。

なんの縁か、インターン先のクラスでの初めての授業実践がその道徳の授業になった。グループで考えた授業を代表者として行ったのだ。「初めてのインターン先での授業。失敗はできない。」私の心のハードルは高く、高くなった。初めての授業、代表者、授業公開と負の要素ばかりが私を追い詰める。確実に、時間だけは刻まれていく。たった45分の激闘は終わりを告げた。授業を行ってみて、思ったことは「おもしろくなかった」。見ていただいた先生、院生には「良かった」と言ってもらえたが、何か引っかかるモノがあった。

そして、やり終えた充足感と何が引っかかったのかわからない不安感のまま、再び木曜カンファレンスに臨む。そして、見ていただいた様々な児童の見取りから、引っかかりである授業の欠点が浮き彫りになってくる。教師としての関わり方、教材の弱さ、手立ての必要性が露わになった。そして、六月の「道徳」企画は幕を閉じていく。と、思いきや新たなチャンスが巡ってきたのだ。インターンに入らせて頂いているクラスの、隣の先生から「うちのクラスでもやってみないか」と言われたのである。省察で終わろうとした「道徳」が新たな息を吹き込まれた瞬間であった。

私の道徳の授業は、私が嫌いな「説教」の授業には成らずにすんだと考える。さらに言えば、それなりに「良い」と思える授業にまで昇華したのではないだろうか。一人では考えつかないような授業案の下、授業を行えたのは非常に光栄であった。

企画の残り二つ、「アクティブラーニングを取り入れた単元構想」と「学び続ける教師像」について述べる。

「アクティブラーニング——」では、先月からひたすら単元構想を練っている。そこには福井大学の学部生も入る。自分の考えを語り、場合によってはアドバイスをしてもらい、深めていく。その逆も然り。しかし、多くの時間は自分の単元に向き合うことが中心である。自己と教材、先行実践、指導要領などに向き合っている。中には、その授業案をインターン先でさせていただいている院生もいる。これだけの時間、単元に向き合うことはなかなかないだろう。その院生にしかないような視点が多く語られ、新たな風が舞い込んでくる。

「学び続ける教師像」では答申を読み、その読み取ったものを院生同士で語り合い、さらにスクールリ

ーダーの先生たちが遺していった実践報告を二週間に渡って読み、「学び続ける教師像」の実態を探っているのだ。その姿はインターン先の学校の先生にも見られるのではないだろうかと考えた。「困り」「悩み」「願い」がそこにはあった。絶やされることのない情熱を、報告書と目で見えた先生の姿を通して感じたような時間であった。

そして、またインターンに戻り、三日間を過ごすのだ。我々の活動は、学校と大学院の両輪で回っている。学校に行き、様々な挑戦をさせていただいている。大学院に行き、仲間と語り合い、木曜カンファレンスに臨むのだ。学校の活動が、大学院での活動よりも忙しくなると、疲労だけが溜まっていく。かといって、大学院での勉強が忙しくなってくると、頭がやりたいことで一杯になってくる。どちらか片方だけが進もうとすると、コースから離れてしまい、苦しい道が待っている。木曜カンファレンスは、その両輪の息を合わせるツールなのだ。片方にブレーキをかけた後、逆に加速させたりするような、「カンファレンス」だと考える。

Schedule

8/17 Mon - 19 Wed 夏期集中講座 Cycle 3a

8/20 Thu - 22 Sat 夏期集中講座 Cycle 3b

8/22 Sat 福井大学教職大学院 オープンキャンパス

10/17 Sat 合同カンファレンス

10/24 Sat 合同カンファレンス（予備日）

【編集後記】夏期集中講座も最後のサイクルに入り、一つの山場を迎えようとしています。さて、今号では6月に開催されたラウンドテーブルの特集を掲載しました。様々な分野、様々な地域、様々な年代という意味で「多様な」人々が、しかし何か共通するものを抱きながら参加する福井ラウンドテーブル特色を、編集しながら改めて感じました。参加して下さった皆さま、寄稿して下さった皆さま、どうもありがとうございました。（山崎）

教職大学院 Newsletter **No.76**
2015.8.17 内報版発行
2015.8.31 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp
